

## ロバート・バートン

### 『憂鬱の解剖』

#### 第3部 第2章 第3節 第1項（承前）－ 第5節 第4項

岡村 眞紀子  
伊藤 博明 訳

オウイディウスは、蠅に、羽虫に、指輪になりたい〔『愛の歌』第2歌15.〕と願い、カトゥルスは、雀になりたいと思った。

ああ、雀のようにあなたと戯れ、  
心の悲しい煩いを和らげることができればいいのに。

〈『詩集』〉 2. 9-10.〉

アナクレオンは、鏡、手袋、鎖飾り、何にでもなりたいと願う。

でも、私は自ら鏡になりましょう、  
いつも、あなたが私をあなたのもので見てくださるように。  
そして、私は自ら衣にもなりましょう、  
あなたが、私をあなたのもので、纏ってくださるように。  
私は、進んで水に変身しましょう、  
私が、あなたの手足を洗えるように。  
私は、乙女の香油となりましょう、  
私が、あなた自身を塗れるよう、  
あなたの胸帯、  
あなたの首飾りでありたい、  
あなたの靴でもありたい、  
いつもあなたが足で踏んでくれるように。

〔『オード集』〈ルビヌス訳〉 30. 〈正しくは 20. 5-19. 現行版では第31番〉〕

おお、彼女を享受できる男は、三倍も幸せだ。ムサエオスでヘロを見た男のように。またヘルマプロディトスに対するサルマキスのように。——お母様はお幸せ、乳母様はお幸せ——

でも、あなたが許嫁と見定め、同衾するに値するとお認めになった  
お方はすべてにおいて、はるかにはるかに幸せです。

[オウイディウス『変身物語』第4巻〈285ff.〉]

同じ熱情が〔プラウトゥスの〕喜劇の中では、女性を行動に走らせる、

彼と褥を共にする女性はほんとうに幸せなのよ。

[『法螺吹き軍人』〈65.〉]

そして彼女がキュロスについて言ったように「彼の妻になる人は幸せ」〔クセノボン『キュロスの教育』第5巻〈2.28.〉〕、否、一夜だけでも彼を享受できる女性は三倍も幸せ、

一夜はユピテルの王笏にも比べられるべき、

[〈偽〉ルキアノス〈『恋する者たち』17.〉]

それは何という夜になろうことか、神々よ、女神たちよ、  
なんと柔かな床になろうことか。

[ペトロニウス〈『サテュリコン』69.〉]

彼女は、ただそのような夜、ネクタルの甘美さの接吻、バルサムの芳香の接吻を求めて、自分の地所中を身の危険を冒して進んでいくだろう。

あなたを眼にする人は、幸い、

あなたの声を聞く人は、もっと幸い、

あなたを自分のものとする人は、もはや神。

[〈ブキャナン『警句集』1.22.1-2,4.〉サモスのルフィヌスのギリシア語からの翻訳]

アラビアでのサナのサルタンの妻は、美しい旅人バルテマを見かけたとき、「おお神よ、あなたはこの男を太陽より白くお創りになりました。でも私と私の夫と息子たちをみな黒くお創りになりました。私は、神に対して、彼が私の夫であったら良かったのに、彼のような息子だったら良かったのと思います」と心の中で嘆いた。彼女は泣き崩れ、その愛に堪えきれなくなったあまり、「(ポティバルの妻がヨセフによって行動に出たように) 彼が彼女と同じ思いに至ってくればいいのにと、侍女たち、ゲザルラ、テゲイア、ガルゼラナを追い遣り、彼に美しい約束と贈り物を山と積み」〔ルドヴィコ・ディ・バルテマ『航海記』第2巻第5章〕、可能な限りの言葉を尽

くして彼に求愛した。

——この最後の好意を、惨めな恋する女にお与えください。

〈ウエルギリウス『アエネイス』4. 429.〉

それでも彼が同意しなかったなら、彼女はすべてを棄てて、彼の小姓にでも、召使いにでも、下男にでもなって、彼と共に立ち去ったことであろう。彼を享受しようと、さらには自分が死に追いやられるのではと恐れながらも、影が追うように、愛しい身体を追おうと決心した〈テオドレ・プロドロムス『愛の歌』。男性なら、女性と同じようにどころか、それ以上に行動し、私財、身代、生命、運命をも費やすであろうし、ジョン王がダンモウで尼僧マティルダゆえにしたように、王なら王冠を手放しもしよう。

しかし、ここでは王として特権を与えられてはいるが、

私は、貴女と一緒に暮らせるよう、修道士となろう。

〔マイケル・ドレイトン〈『イングランドの英雄的書簡集』69-70.〕

神々は、マルスとウェヌスが他の神々すべてに対してそうであったように、何らかの恥（神々の誰も悲しみを抱きながら求めることはない〈オウィディウス『変身物語』4. 187-88.〉）が見ものになるのも耐え忍ぶであろう。ルキアノスのメルクリウスもそう願ひ、おそらくあなたもそう願う。彼らは迷いなく生命を賭して進みゆく。

——彼女のためには、私は死をも恐れはしない——

〔ホラティウス〈『オード集』〉第3巻第9歌〈11.〕〕

いや、それ以上、彼女のためには、私は二度死ぬことも恐れはしない。もし彼女が死ねば、彼らに救いはない、彼らは彼女と一緒に死ぬほかなく、そうせずにはいられない。カルカニーニでの一人の恋する男は、愛しい人の墓に次のように書き記した。

クインティアは逝った、でもクインティアは独りで逝ったのではなし、

クインティは逝った、でもクインティアとともにわれ自身も逝った、

微笑みも逝く、優美さも逝く、愉しみも逝く、

わが魂は今やわが胸にはなく、墳墓の下にあり。

〔「クインティアの墳墓に」3-5.〕

いかに多くの愛に溺れた者たちが、同じような場合に同じことを言うことだろうか。しかし、彼

らが愛する人のために魂を危険にさらすということを考えれば、つまらぬことである。

そして若者たちの間では、誰かが見とれて言葉を発した、  
天に神がいることを私は望んだわけじゃない、  
家にわが妻ヘロがいることを望むのだと。

[ムサエオス 〈『ヘロとレアンドロス』73, 80-81.〉]

ウェヌスはアドニスゆえに天を棄てた——「天よりアドニス優先される」[オウィディウス『変身物語』10. 〈532.〉]。チョーサでの老ジャニヴェーレは美しい妻を娶ったときに、このような愛するひとを得たからには、決して天に行くべきではなく、ここ地上で楽しく生きるべきと考えた〈「商人の話」393-408.〉。これほどの女性を得たからには、彼は断言する、

私は神々に対して彼らの天を羨んだのではなく、  
神々が私に対して私の運命を羨んだらう。

[ブキャナン『十一音節詩集』〈5.「アントニオ・ゴウエアノへ」14-15.〉]

またある者は、恋に落ちた相手を見たいと心底願ひ、あれもこれもかなぐり棄てて、ただ彼女だけに会いに行く。

私のなす過ちのすべてを、もし運命が償おうとしてくれるなら、  
私にとって幸運なことに、神々よ  
私に眼の前にわが女神を見いださせたまえ、  
わが心を捉えている女神を。

[ペトラルカ 〈ペトラルカ作品には見当たらず〉]

しかし、恋する者たちの毫碌、狂気、隷属、盲目、愚かな幻覚、虚飾、その苦悩、願望、虚しき企てを、誰が数えあげることができようか。

とはいえ、こういったことにも拘わらず、とても多くの、こういった恋する者たちに起こりがちな、煩わしく、馬鹿馬鹿しく、厄介な徴候、不都合、突拍子もない発作や情念のなかに、こういった感情が引き起こす、何か善き、雅な資質もありうるのである。そういった感情は賢明な者をも愚かにするように、往々にして「愚かな者を賢明にし」、「卑しい輩を寛大に、臆病者を勇敢に、強欲者を鷹揚で気前よく、無骨者を礼儀正しく、無慈悲な者も優しくさせ、邪悪で不敬な者をも敬虔に、無精者を身ぎれいに、粗野な者を情け深くし、ものの言えない犬野郎を雄弁に、怠惰なオスバチ野郎をきびきびと俊敏にさせる」と、カルダーノが[[『知恵について』第2巻で] プルタルコス 〈の『愛をめぐる対話』〉]に基づいて記している。「愛欲は獣の心をも手懐ける」〈ヒ

エロニムス『書簡集』117. 6.)。かの獯猛、残虐、粗暴なキュクロプスのポリュベモスすら、ガラテアゆえに溜息をつき、しとど塩辛い涙を流した。溜息や涙をさらに激くさせ、これ以上の熱烈な歓喜や不興を生み出す他の感情はない。プルタルコス『饗宴』第1巻第5問で「恋する者の魂は芳香や甘い匂いに満ち」と述べ、「心地よい音や調べに満ち、死すべきこの世のものに、愛が益より害を為すかどうかなど、ほとんどわからない」と付け加えている。この感情は活気を与えるが、そうでなければ柔和にも愚かにも、寛大にも、勇敢にもし、「愛は大胆さを作りだす」[オウィディウス〈『変身物語』4. 96.〕]。アリアドネへの愛はテセウスをととも大胆にさせ、メデアの美しさはイアソンを優れて覇者とさせ、「愛は恐怖を追い払う」。プラトンは、ウェヌスがマルスを勇敢にさせた、と考えている[『饗宴』〈196D.〕]。「若者は、いかなる酷い過ちを犯すことも、愛する女性が聞いたり見たりすることがあるからと、ひどく恥じるものである。瀕死の状態にある敵を仰向けに寝かそうとした者が、その敵が背中に傷を負っていることを恋人が見ぬように[プルタルコス『愛を巡る対話』17.]、彼の想い人が彼を臆病者だと言わないためにそうしたのと同じである。「もし、愛する人、愛される人といった、恋人たちを構成兵士とする軍隊がありうるとするならば、その兵士たちは、その統治において驚くほど勇敢、賢明で、慎みが過ちを犯すのを引き止め、張り合うことが善き誠実な行為をするように促し、わずかの数の軍隊でも多人数の他の軍を圧倒することになるだろう」〈プラトン『饗宴』178E.〕。愛が燃え立たせることなく、神的気質、英雄的活気をもたせることがないほど、臆病な者、それほどの腰抜けなどない。このような場合についてアンジェリアーノが言ったように「天の全体が落ちてきたとて、私は恐れない」(『エロトパイニオン』〈「自身の熱狂について」1. 21.〕)。何ものも愛する者たちを恐れさせることなく、狼狽させることもない。しかし、あの勇敢な二人の妖精の騎士ブランディマとパリデルが、美しいフロリメルのためにその面前で戦ったように、

双方ともに怒りを新たに剣を抜き、  
二匹の狂ったマスティフ犬のように互いにとびかかり、  
盾を切り裂き、鎖帷子を切り刻み、兜をかち割った。  
どちらも、すさまじく怒り狂って、  
あたかも二人が、同時に胸から魂を引き裂いたかのごとく  
攻撃したゆえ、血の川がどっと流れ落ち、  
あたかも二人の生命の泉も涸れたかの如く、  
大地一面真っ赤な血がまき散らされた。  
二人の武具は血糊で染まったが、  
二人とも力を緩めていったん一息つこうともしなかった。  
彼らの悪意は、死ぬまで戦い抜かんとばかりに激しくて、  
どちらも先に死ぬことに(身をゆだねるというより)意を決していた。

[〈スペンサ』『妖精の女王』第4巻第2歌〈17. 7-9, 18. 1-8.〕]

恋に落ちたつまらぬ輩は、愛しい恋人のために、できるだけのことをしようとするものである。彼女に仕えるために戦いもすれば、かの有名なアルゴスの丸盾、アルギウムの盾さえも取って来[ゼノドトス『金言集』第6巻〈エラスムス『格言集』2.8.41.による〉]、とにもかくにも危険を冒し、いかなる行為にも出る。当時のスロイスの総督、スペイン人のセッラーヌスがスピノラ侯爵に応じたように、たとえ敵が5万の悪魔を彼に対して向けてきたとしても、凌ぐであろう。世界の九名士のオリヴァーやローランド、そして500人ほどの貴族もみなこの類。彼は全身これ金属、人間というより堅固な甲冑そのもの、この恋愛という件に関しては、自分の能力を超えて向上している。アガトンが議論するように、真に愛する者は賢明で、公正、節度あり、勇敢なのである[プラトン『饗宴』〈196C-D〉]。「それゆえ私には疑う余地がないのだが、もし、そういった恋人たちの軍隊をもてば、すぐにも世界制覇を果たすことができよう、相手がこれに対して、同様の愛する者たちの軍隊を擁していることさえなければ、ではあるが」[『宮廷人』第3巻]と、カスティリオーネが推定している。というのも、かの天での生命がけの犬と生命がけの兎のように[ヒュギヌス『天文詩』〈3〉]、彼らは戦うだろうからであって、一勝負一勝負重ねて終わることがない。もしイザベラ王妃と侍女たちが城砦にいなかったなら、スペイン王フェルディナンドもグラナダを征服することはなかったであろうと、カスティリオーネは考えて、「王妃たちがいれば、いかなる勇気をスペイン王が得、わずかのスペイン兵が多勢のムーア人を征服したかは、筆舌に尽くしがたい」〈『宮廷人』〉と述べる。エドワード3世の時代のウォルタ・マニ卿が、愛する貴婦人の寵愛が得られず、龍のごとく戦ったように、恋する者たちはいかなる危険をも冒す。というのも、プラトンが考えるように「愛する者たちだけは友のために死なんと欲し」[『饗宴』179A.]、愛する女性のために戦うからである。そういうわけで、恋する男は女性たちを、高潔な行為の観客もしくは応援者として宿営地に伴った[『法律』第5巻]。そういう場合には、貴婦人たちの従者その人[スペンサ『妖精の女王』第3巻第8歌]、ランスロット卿、トリストラム卿、カエサル、アレクサンドロスすら、彼らにまして堅固たる意思をもつ者はなく、彼らに優る者はない。

愛は勇気だけではなく、私が述べたように、巧妙さ、機知、それに多くの快い方策をも増加させる、

というのも、愛が策を掻き立て、欺瞞を供すのだから。

[マントヴァのバティスタ『牧歌』1.〈107.〉]

ユピテルはレダを愛し、欲望を遂げる方策に窮して、自らを白鳥に変え、ウェヌスに鷺の姿で自分を追わせた。ウェヌスはそのとおりにし、避難の場所を求めてユピテルはレダの膝に逃げこみ、レダは彼をかき抱き、かくして深い眠りに落ちた。ところがユピテルは眠っている彼女を押さえつけ、かくして思いを遂げたのである。愛は知恵と周到さで、そのような策略を無限に、そのような精巧な行為をあまた企てることができる。

——誰が愛する者を騙すことができようか。

[ウエルギリウス〈『アエネイス』4.296.〉]

教養、品位、完璧さのあらゆる作法、善き振る舞い、さらなる健全さと快さ [プラウトゥス『カシナ』(218.)]、上品な優雅さに心優しい想念。ボッカッチョには、この手の目的の、キモンとイピゲニアの楽しい話がある〈『デカメロン』5.1.〉。その話をボッカッチョはギリシア作家から借用してきたが、その話をベロアルドはラテン語に訳し〈『キモンの神話物語』〉、ベベルは韻文にしている〈『新小品集』〉。このキモンは道化者であった、重要なしかるべき人物で、キプロスの総督の息子であったが、とても愚かで、父親が恥に思い、田舎に所有していた家に養育のためにやったほどであった。たまたま、いつもの習慣のように一人で歩いていたとき、若く華麗で高貴な女性を見かけた。イピゲネイアという名の、キュプロスの市長の娘で、お供の女性と一緒に、水浴びをしたばかりの小川の畔の茂みで、スモック姿でぐっすり眠りこけていた。「キモンは彼女を見るや、杖に寄りかかって立ち、彼女に掴みかかり、彼女は動けずうろたえた」〈ベロアルド『キモンの神話物語』〉。ついに彼は、あまりにも深く、その光輝あるものへの恋に落ちたゆえに、奮起してわが身を考え始め、必ずや彼女に従って都市まで行こうと考え、彼女のために教養ある人物になろうと、歌や踊りや楽器演奏を習い、短期間で貴人の一人としてのあらゆる資質や完璧さを身につけ、それを友人たちもとても喜んだ。あっという間に、彼は馬鹿、道化から、キュプロスでもっとも完全な貴人となり、数々の勇猛な武勲を挙げ、イピゲネイアへの愛のためのあらゆることをなした。一言で言うならば、彼ら誰もについて、決してそれほど馬鹿でも粗野でも無骨でもなく、木偶の坊でも蓮っ葉でもなく、いったん恋に落ちれば、この上なく端正で身ぎれいになるものだと言えるだろう。「愛は、すべてのもの、輝かしい華麗さに先立つ」[プラウトゥス『カシナ』第2幕第4場]。恋するものは流行を追い、おめかしをし、自分自身を好評価し始める。ウェヌスが美の母親だからである。船も出帆準備に、恋人が来るのを迎える高貴な女性が装い支度するほどの時間をかけはしない。絵描きの仕事場、花咲く草原も、自然の宝庫では、夫を求めている若い女性、適齢期の娘、ノヴィツァすなわちヴェネツィアの花嫁ほど、優美な様相を見せはしない。娘に言い寄る若い男たちの、作った表情、作った歩きぶり、服装、仕草、振る舞い、すべてが作りもの。世界中の美しさ、優雅さのすべてが彼女の顔にある。彼女たちの最上のドレス、リボン、鎖、宝石、絹、リンネル、レース、スパンコールがそれに続くはずで、境遇が許すものを超えて、彼らは優雅さを追求する [プラウトゥス〈『商人』23.〉]。彼らは限度を超えて内気であったり淫らであったり、突然あまりにももの好きにもなる。いかにして端正に装うか、優雅でいて楚々としているか、身を飾るか、それだけが彼らの骨折り、彼らの仕事である。若い男は、想い人がやって来るのを見るや否や、ただただ、めかしこみ、肩からずり落ちている上着を引っ張り上げ、ガーター勲章やポイント紐を締め、帯やカフスをつけ、髪を撫でつけ、髭を捻る。メルクリウスが恋人の前に来ようとしたときには、

彼は、上衣が巧い具合に垂れるように、  
縁が黄金であるのがすっかり見えるようにと、整える。

[オウィディウス『変身物語』2.〈733-34.〉]

サルマキスは、まずめかしこむまでは、ヘルマフロデイトゥスに見られたくないと思ったのであった。

すぐにも近づきたかったものの、まだ行かなかった。

身を繕い、衣装を点検し、  
表情を整え、美しく見えるように準備するまでは。

[オウィディウス『変身物語』4.〈317-19.〉]

息子アエネアスが女王デイドの前に出たとき、彼が神のごとくであるように、ウェヌスは計らっていた。

(顔と肩は神に似ていた、ほかならぬ母親が  
息子に優美なる髪と、若さの茜に輝く光と、  
瞳に歓び溢れる誉れとを吹き込んだがゆえ。)

[ウェルギリウス『アエネイス』1.〈589-91.〉]

ウェヌスは、自然、人工、ありとあらゆる騙りを使って、息子を仕立て上げる。ママエアが、息子ヘリオバガルスが初めて国民の目の前に出たときに、新しく選ばれた皇帝としてしたように。野蛮なキュクロプス族のポリュペモスがガラテイアに求愛したとき、

ポリュペモスよ、今やあなたは美しい姿、好かれることが気にかかり、  
ときにごわごわの髪を熊手でとかし、  
ときに毛むくじゃらの顎髭を鎌で切り揃えたいと思い、  
獣のような顔を水鏡に映して、顔つきを作ろうとする。

[オウィディウス『変身物語』13.〈764-67.〉]

彼は突然、研いだばかりの斧のように、鋭くこざれいになった。自分を優れた容貌、優れた才能があると思い、今ではすっかり優男である。

さあ、ガラテイアよ、おいで、私の贈り物を軽んじないで。



たしかに、私は私のことを知っている。近頃も私は、似姿を  
澄んだ水に映して見たが、私の姿を見て好ましく思った。

〈オウィディウス『変身物語』13. 839-41.〉

私はひどく醜いわけではない。近頃も浜辺で私を映して見た、  
風が凪いで海が静まっているときに。

[ウエルギリウス『牧歌』2. 〈25-26.〉]

あらゆる求婚者にとって共通の資質とは、自分自身を欺き、豪華に着飾り、すっかり磨き上げ、きちんとし、櫛を入れ、巻き毛にし、髪に粉をはたき、髪を飾って鍔をあて、長く巻き毛を垂らし、耳に花をあしらひ、香水をふった手袋、指輪、スカーフ、羽毛、留め飾りなどを身につけ、あたかも「王のお気に入り」のように、流行が変わるごとく、毎日新しい衣服に身を包むことである。あたかも卵の上を歩むように進み、ヘインスがプリメリウスに対して書いたように、「もしひとたび彼がある女性に酔いしれてしまえば、夜は目覚めて過ごし、書物を打ち棄て、溜息をつき、嘆き、ときおり自らの辛い運命に涙し、あらゆるものについて、いかなる帽子、帯、上衣、ズボンが流行っているのか、いかに顎髭を切り、髪を切りそろえ、口髭の先を整え、頭を巻き毛にし、顎髭の先端を切りそろえるか、顎髭が広い場合は東端が西端と対応するように気を遣う」[[『書簡体論攷』]。さもなければ、彼はあざ笑われるであろう、綱を編むのに適した、長く毛深い山羊の髭を生やしていた、あの背教者の教皇ユリアヌスのように。というのも、彼は『ミュソポゴン』[338D.]、すなわち、アンティオキアで自分自身を弁明するためにおこなった弁論的演説において、その顎髭が接吻を妨げたと、自虐的に告白しているからである。「というのは、それは淨い唇を淨い唇に、それゆえ、より甘美な唇に重ねることを許さなかった」。しかし、彼はその結末については重視していなかったように思われる。「私は接吻を与えるのも受けるのも苦にならなかった」。しかし（わが著者〔ヘインス〕に従えば）、恋する若者には大きな関心事であろう。彼はこの点についてより重きをおき、「とても腕のよい仕立屋や理髪師と懇意にならねばならない」。

その理髪師は子どもだが、ネロのタラムスも  
もつことのなかったほどの技をもっていて。

[マルティアリス『エピグラム集』5. 〈正しくは8. 52. 1-2.〉]

「彼は上品な靴紐、金具付きリボン、靴下留めを身につけ、正確に話し、正確に歩き、正確に食べ、飲むに違いない。そして何から何まで、彼は正確に狂っているにちがいない」。

恋をしている者が授かっている他の善い資質の中で、彼は歌うことと踊ることを、何かの楽器などを演奏することを学ばなければならない。というのは、もし彼が愛の磁石に真に触れている

ならば、疑いもなくそれらをおこなうからである。というのは、エラスムス〔『格言集』〕第4巻第5章第15格言〕が述べているように、「愛は音楽と詩を教える」からである。愛は彼らを音楽家に変え、短詩、マドリガル、エレジー、愛のソネットを創り、いくつかの快い旋律で歌い、あらゆる善き資質を、それが可能ならば得させるものである。ユピテルは、メルクリウスがピロロギアに恋しているのを見て取った〔マルティアヌス・カベッラ『メルクリウスとピロロギアの結婚』第1巻〈36.〉〕。というのは、彼は言語、洗練された弁論、(ある者たちが書いているように、スアデラ自身がウェヌスの娘だったので) 諸学芸と諸学問を、「彼女の気に入るもの」をすべて学び、彼の想い人を喜ばせ、取り入ろうとするからである。彼らの主たる精励刻苦は、歌うこと、踊ることであり、そして疑いもなく、もし多くの紳士と淑女を愛が掻きたてなければ、彼らはこのような類の事柄に精通することはないだろう。カスティリオーネが述べているように、「ほとんどの者がおこなっているように、女性たちのためであれば、誰が演奏することを、あるいは音楽に心を傾けることを学び、踊ることを学び、あるいは多くの詩や愛の歌を創るであろうか。というのも、彼らはその手段によって、彼女たちの歓心を買ひ、彼女たちの好意を得ようとするからである」〔『宮廷人』第3巻〕。われわれはこのことを、われわれの若い女性たちと妻たちにおいて、日々証明されているのを見ています。彼女たちは少女のときに、彼女たちの両親から経済的な負担と庇護を受けて、歌い、演奏し、踊るために多大な努力を重ね、それらの優雅な資質を獲得するが、いったん結婚すると、楽器に触れることが稀になり、それに気を遣うこともない。カッシアヌス・バッシスは『農耕論』第11巻第18章において、クビド自身を、彼が神々の間を跳び回っていたという証拠のゆえに、偉大な踊り手としている。「彼は一杯の神酒をぶちまけたが、それが白薔薇に滴り落ち、それ以来、その薔薇は赤くなった」。カリストラトスはダイダロスの助けを借りて、クビドの彫像の周りを多くの若い少女たちがたえず踊っているように制作したが、それはおそらく、クビドが踊りに深く影響されることを意味しており、疑いもなくそうであった〔ピラストラトス『絵画論』第3巻「彫像について」〈2. 1.〉〕。というのは、クビドとプシュケの結婚式で、神々は祝宴に誉れを与えるために列席し、(アプレイウス〔『変身物語』第6巻〈24.〉〕が述べているように) ガニューメデスが神酒をなみなみと注ぎ、ウルカヌスが料理人で、ホーラたちがすべてを薔薇と花々で飾りたて、アポロンが豎琴を演奏し、ムーサたちはそれに合わせて歌い、「ウェヌスは甘美に音楽に合わせて踊った」。機知に富むルキアノス〔『神々の対話』〕第4巻〈「海神の対話」15. 3.〉〕は、情熱的な愛の章句、すなわち、ユピテルのエウロパの略奪、そしてフェニキアからクレタへの遊泳についての楽しい記述において、海を静かにさせ、風を収まらせ、彼らの前で、馬車に乗るネプトゥヌスとアンピトリテに波を遮らせ、トリトンたちの各々に松明をもたせて、彼らの周りで踊らせ、半裸の海のニンフたちに、海豚の背に乗って手拍子を打って祝婚歌を歌わせ、クビドに波間の上で敏捷に踊らせ、そして、彼らを貝に乗って追いかけるウェヌス自身には、彼らの頭に薔薇と花々をまき散らさせる。プラクシテレスは、彼の愛の絵画すべてにおいて、クビドを常に微笑み、踊り手たちを見つめているように計らった。そして、ローマのサン・マルコの庭園の中で、(誰の作品なのか私は知らないが) もっとも愉快的な作品の一つ

は、眠っている少女の周りで踊っている多くのサテュロスである [コロンマン『死者たちの奇蹟について』第5部〈正しくは第7部〉第28章]。このように、踊ることは常に、恋愛事への、いわば必然的な付随物である。若い娘たちがもっとも喜ぶのは、祝日の夕べのあと恋人と会い、メイポールの周りや街の草地の楡の影の下で踊ることである。フランスでは[〈R・ダーリントン卿』『フランスの光景』]、市民の妻と少女にとって、通りで輪になって踊り、そして、たびたび適当な楽器が欠けていれば自分自身の声で楽しい音楽を奏で、それに合わせて踊ることほど身近なものはない。実際に、何度も何度も、この愛は、歯よりも足の指の数が多い老人と老婦人を踊らせ、——「さあ、ジョン、私に接吻しておくれ」、仮面劇と無言劇に参加させる。というのは、コモスとヒュメンは、仮面劇とこのような歓楽をすべて、途方もなく愛し、ある場合には男性に女装することを許し、そして、若者と老人、富者と貧者、貴い者と卑しい者など、あらゆる種類の者たちが、見境なく踊ることを許すからである。パオロ・ジョーヴィオは、哲学者のアグスティノー・ニーフォを批難している。「というのは、彼は老人であり、著名な教授であり、多くの子どもたちの父であるにもかかわらず、若い娘への愛に狂い（そのことを見て、彼の友人たちの多くは恥ずかしくなった）、一介の通風病みの老人なのに、ヴァイオリンに合わせて踊ろうとしたからである」。多くの者がそのことを軽蔑して、彼のことを笑った。しかし、全能のアモルが彼にそのようにさせたのであろう。

アイリスの杖によって、  
 性急なアモルは、私が追うようにと  
 激しく駆りたてる。

[アナクレオン『詩集』〈ルビヌス訳〉7.〈1-3〉〈現行版では第31番〉]

これは目新しいことでも、恥ずべきことでもないが、それはなぜなのか。それについて適切な理由を挙げることができるだろう。クピドと「死」がある宿屋で出会った。彼らは陽気に浮かれていたので、互いに箆から幾本かの矢を取りだして交換したが、そのとき以来、ときおり若者が死に、老人が愛に溺れることになった。

かくして若者は死に、かくして死にゆく者が恋をする。

[ジョアシャン・デュ・ベレー『エピグラム集』]

ところで、誰がそれに抗うことができるだろうか。もしわれわれが、ひとたび恋に陥れば、老いも若きも、われわれの歯が、ヴァージナルのジャックのように、頭の中でがちがちと鳴っていても、あるいは同じく、橋のアーチのように離れて並んでいても、そこには治癒薬は存在せず、われわれは必要に駆られて、テーブルや椅子や腰掛けなどの上で、トレンチモア・ダンスを踊るにちがいない。そして、クッション・ダンスは素敵なダンスである。プルタルコス『響

宴』第1巻第5問題で、ある仕方で、それについて弁明しており、加えてわれわれに、いかなる意味で、「以前は未熟だったとしても、その者に、愛は音楽を教えるのか」、いかに愛は、以前は技巧をもっていなかった彼らに、歌い踊ることを学ばせるのかについて語っている。彼はこう結論している。その力と特権的な愛だけが、われわれを支配する。（彼が述べているように）「愛は寡黙な者を話すようにさせ、慎み深い者をきわめて横柄な者に、鈍い者を鋭敏な者に、遅鈍な者を敏捷な者にし、そして、厄介で、卑しく、扱いにくい無作法者をきわめて賞讃されるような者にする。それは、鍛冶屋の炉の中で、火が鉄を延ばし、柔らかくし、扱いやすくし、加工が容易なものにするのと同様である」。それどころか愛は、彼を極端に浪費家とするだろう。彼は、かつてコリントのライスに起こったように、一夜の床のために百セステレスを支払い〔ゲッリウス『アッティカの夜』第1巻第8章〕、あるいは、ムンドゥスがパウリナに「一夜のために二十万ドラクマ」を支払ったように〔ヨセフス『古代ユダヤ誌』第18巻第4章〕、彼の全財産を（多くの者がこのような場合におこなうように）愛のため、自分の愛する者を得るために費やすことになる。そういうわけで、多くの者が愛を葡萄酒に喩えているように、葡萄酒は人々を陽気で快活にし、浮かれさせ、しかし悲しくもさせ、さめざめと泣き、歌い、踊りなどさせるのである。

しかし、恋する者たちの他のすべての徴候の中でも、それを凌駕することが容易でないのは、いかなる条件のもとにおいても、もし彼らがひとたび愛に陥るならば、自らの才能を韻文家、舞踏家、詩人に向けることである。というのは、プルタルコスが述べているように（『響宴』1.5.）、「彼らは自らが恋する者たちの美点の証人と吹聴者となり、われわれが彫像を黄金で飾るように、彼女たちを詩句と賞讃歌で飾り立て、万人によって記憶され、讃嘆されるようにするだろう」。古の人々は他の事柄と同様に、ときおりこの種類の事柄に耽溺するだろう。愛の熱は彼らの凍った情感を融解し、彼らのこれまで不能にしてきた古い氷を溶かし、たとえ彼らがベルトより上は六〇歳であろうとも、ほとんど三〇歳以下にするであろう。ジョヴィアーノ・ポンターノは古風な馬鹿げた詩をつくり、へぼ詩人が想い人の歡心を買うように仕向けている。

マリアーナよ、吠えないでくれ、私の白髪を蔑まないでくれ、

女神は、私を老人から若者にすることができるのだから。

〔『対話集』第2巻〈「アントニウス」2.30.〕〕

彼らは（とくに若者なら）いつも愛の歌や小歌を歌っているだろう。そして、彼らが教会に行く、あるいは行くべき時間であっても、それを控えることはできない。われわれはこの点に関して、われわれの老作家であるウェストミンスター人〈マシュー・パリス〉にこのテーマでの面白い物語を見いだす〔『歴史精華集』第298葉〕。（もしあなた方が信じるならば）紀元後1012年、ザクセンのケムニッツで、クリスマスの夕べに教会で司祭がミサをあげているとき、一群の若い少年と少女たちが教会の敷地内で輪になって愛の歌を歌っていたので、彼は喧しくしないように伝えたが、彼らはずっと歌い続けた。そして、もしお望みならば、その歌そのものをお読みいただき

ましよう。

葉が繁った森を通り、馬で走ってきた、  
そして、美しいメズウィンドと結婚した。  
なぜわれわれはここに居るのか、なぜ行かないのか。

彼らはこのように歌った。司祭は苛立ち、ついには我慢ができなくなって、教会の守護聖人である聖マグヌスに対して、彼らが全員そこで、12ヶ月の間歌い、踊るように祈願した。そして、彼らは食べることも飲むことも、疲れることも止めることもなく続けた。そしてようやく、その年の最後に、彼らは歌うことを止めて、ケルンの大司教ヘレベルトゥスによって解放された。彼ら、とりわけ若い連中は、あらゆるところでこのようにおこない、愛の物語を読み、あれやこれやの若者について、美しい少女について話し、好色な物語や下品な歌について歌い、語り、聴くだろう。このような物事が彼らの唯一の楽しみであり、彼らが絶えず考えていることである。そして、グェスタヴィーノが『アリストレス「問題集」註解』第4部第27問題で付け加えているように、「豊富な精液のために、常に考えこみ、しばしば性愛について思い起こし、欲望に駆り立てられる」。こうして、もっとも熱心に望むものが生じる、衝動的な身体が、衝動的な魂が、愛に満ちた思いが、刺激的な考えが、甘く心地好い望みが生じる。すなわち、こうして彼らは他の主題については、考え、進んで論じ、語ることはほとんどできない。彼女たちの唯一の望みは、もし魔術で可能ならば、自分の夫の姿を鏡の中に見ることである。彼女たちは、いつ結婚することになるのか、何人の夫をもつことになるのかを知るためには何でも供するだろう、「玉葱占い」という、クリスマスの夕べに祭壇に置かれた玉葱による一種の予言によってでも、あるいは、彼女たちの最初の夫を知るための、聖アグネスの夕べに断食することによってでも、あるいは「大麦占い」によってでも、あるいは同じことを知りたいためにケーキの中の豆によってでも。この愛があらゆる良い想念、適正さ、装飾、風儀、優雅さ、喜び、心地好い表現、甘美な動きと仕草、喜び、慰安、歓喜、そしてわれわれの生のあらゆる甘美さの原因なのである。

いかなる人生があろう。どんな歓びがあろう、黄金のウェヌスなしでは。

彼女の庇護が、もはや私になくなれば、私は死のう。

〔<ストバイオス〈『説教』61.〉ギリシア語からの〈ミンネルムス訳「断片1」1-2.〉〕

もはや愛するより死なせてほしい、とミンネルムスの詩の陽気な気狂いの男は言う。この愛は、われらの辛く退屈な労働に味を付け、味気ない行為に風味を与える。

愛がなければ、闇が、無気力が、老いが、  
疫病等々が、立ち現われる。

「アンジェリアーノ〈『エロトパイグニオン』「賞讃さるべき愛」7-8.〉」

われらの悦楽はほとんど、仮面劇も、無言劇も、宴も、愉快的な会合も、結婚式も、楽しい歌も、すてきな調べも、詩も、愛の物語も、芝居も、喜劇も、アテルナ道化喜劇も、ジグ舞曲も、フェステナ猥歌も、エレジーも、オードなども、ここから生まれる。ベルスの息子ダナウスはアルゴスでの彼の娘の結婚式で、それまで耳にされた、初めての（とも言われる）演劇を始めた〔ヒュギヌス〈『神話伝説集』〉第272章〕。ジョーヴィオやコンティーレ、パラダン、カミーロ・カミッリを信ずるなら、シンボル、エンブレム、インプレーザ、ドゥヴィーズも、この愛に端を発する。われらの芸芸や学のほとんどが、何よりも絵画が、最初、愛のために創り出されたと、パトリツイは言っている〔〈『王国と王の統治について』〉第4巻第11題〕（プリニウス〈『博物誌』〉第35巻第12章〈正しくは第5章15-16.〉）。シキオン人デブリタデスの娘が、戦に赴く恋人と別れることになったとき、恋焦がれ果てることなきようにと、石炭で肖像を創って壁に取り付けた。蠟燭がシルエットを映し出すように創ったのであるが、それに感心して、後に彼女の父親が完成した。それが最初に作成された絵であったということである。その後長くシキオンは、絵画、彫刻、彫像、音楽、そして哲学でも、ギリシアのどの都市よりも優れているとされた〔ゲルベル『ギリシアの知恵点描記』第6巻〕。アポロンは医術や占い、信託を最初に創り出し、ミネルウァは機織りを見だし、ウルカヌスは鉄工に、メルクリウスは書き物に関心を示した。しかしいったい誰が、これらすべてを彼らの頭に吹き込んだのだろうか。愛である。もし愛さなかったなら、それらを獲得することもなかったろう。彼らはそれらの物や事を愛し、最初はその事物のために心奪われたのである。ウルカヌスは、こよなく見事なブローチやネックレスを創ったが、それを随分後になってペギオスの息子たちアクシオンとテメノスが、その卓絶した価値ゆえにデルポイでアポロンに献じた。ところが僭王パリュロスが盗み去り、自分が哀れなほど惚れ込んでいたアリストンの妻に与えた（と、パルテニオスがピュラルコスに依拠して語っている）。しかし、なぜウルカヌスは、この素晴らしいブローチを作ったのか、自分が愛していた、カドモスの妻ヘルモニオネに与えるためである。われらが馬上槍試合や、馬上武術試合、ガーター勲位、金羊毛勲爵士章など〔フランス『印章、紋章、エンブレム、ヒエリグリフ、シュンボルムの解説』第3巻〕、

名望は愛の許に存す――

〈オウィディウス『名婦の書簡』4.161.〉

すべてはその端を愛に発し、多くの物語に例がある。こういった方法で彼らは愛する心を想い人に、そしてそれを眼にする人たちに見せようとするのだと、ジョーヴィオは言う（『戦いと愛のインプレーザについての対話』）。愛は、詩のほとんど唯一の主題、我々のすべての創意はそこに向かい、我々の歌のすべて、かの古のアナクレオン詩のいずれもまた然り（ゆえに、ヘシオドスはムーサたちとカリスたちをいつもエロスに従わせ、プルタルコスが考えるように、メナンド

ロスもその他の詩人たちも愛の神官であった)。われらがギリシア、ラテンのエピグラム詩人たち、愛の作家たち、もっとも古くはアントニオス・ディオゲネスで、彼の作の梗概が、ポティオスの『ビプリオテカ』、ロンゴス・ソピスタ、エウスタティオス、アキレウス・タティオス、アリスタエネトス、ヘリオドロス、プラトン、ブルタルコス、ルキアノス、パルテニオス、テオドレ・プロドロムス、オウィディウス、カトゥルス、ティブルス等々に見られる。新しくはわれらが時代のアリオスト風、ポイアルド風、そして『アルカディア』、『ウレイニア』、『妖精の女王』などの作者たち〈フィリップ・シドニ、メアリ・ロス、スペンサなど〉、マルルス、リーチ、アンジェリアーノ、ストロツィ、セクンドゥス、シャブランなど、それにその他のあの機知にとんだ現代詩人たちも、この類の詩を書いたが、それもただとても多くの愛の症状の現われとしてである。彼らの書すべては、愛の梗概や要約、愛の聖務日課書、愛する者たちの生と死と忘れ難い冒険の伝説。いやそれ以上で、「彼らが読まれるのも、賞讃されるのも、愛のおかげ」、法律家ネヴィッツァーノが「卓越した詩人で、自分自身が恋に落ちずに、素敵な話を創りだした者も、褒められるべき詩をものした者もない」[『婚姻の詩歌集』第4巻第102番]と考えたように、詩人はクビドの翼の羽根を得ずして、彼が書いたように艶な詩を書くことはできなかった。

好色なプロペルティウスよ、キュンティアがお前を詩人にした。

麗しきリュコリスにガリウスの才が存し、

美しいネメシスが弁舌爽やかなティブルスの名声であり、

レスビアはお前に書き取らせた、博学のカトゥルスよ。

ペリグニーもマントヴァも詩人の私を追い退けることはない、

もし、だれかが私のコリンナに、もし誰かが私のアレクシスになってくれるなら。

[マルティアリス『エピグラム集』第9巻〈正しくは第8巻〉73.〈5-10〉]

トラキアのオルペウスも詩歌においては私に優ることはなく、

リノスもまた然り。

[ウエルギリウス『牧歌』4.〈55-56〉]

ペトラルカのラウラは彼を有名にし、アストロフェルのステラ〈も詩人フィリップ・シドニを〉有名にした。ジョヴィアーノ・ポンターノの恋人は彼の描く薔薇や堇、百合、放縦、追従、冗談、優雅、ナルドの香油、春、香料、マルス、パラス、ウェヌス、カリス、クロッカス、月桂樹、香油、木香、涙、没薬、詩歌、そして彼の詩の数々の源となった。なぜあの時代のイタリア人は総じて良き詩人、画家なのか。それは彼らの誰もがいかなる類の者であれ、愛する人がいたからである。田舎者でも、豚飼いでも、馬の糞の臭いを放つメナルカスやコリドン、むさい男の子でも、いったん愛の美酒を味わえば、たちまちにして靈感を吹き込まれる。精緻なエンブレム、手の込んだインブレーザ、豪華な仮面劇、馬上槍試合や馬上武術試合の代わりに、彼らは祭式通夜、精霊降

臨祭、羊飼いの祭り、祝祭日の集会、地方の踊り、輪舞をし、樹に名前を刻み [ピエトロ・カブレット 〈『愛の蔑視』 1. 31.〉]、真の恋人の結びをし、ちょっとした贈り物をする。

二つに分けたハートや指輪の徴を用いて、  
羊飼いたちは、恋愛では王たち同様引っ込み思案。

貴人を、貴婦人を、王を、王妃を、そしてヴァレンタイン・デイの相手を選んで、恋人同士となる、

コリュドンとピュリス、ニュサとモプソスは  
優美なドゥシベルとトプスとともに。

オードやエピグラムやエレジーの代わりに、彼らはバラッドや田舎の唄を、「ああ、お嫁さん、可愛い可愛いお嫁さん」〈チャイルド『民間伝承バラッド集』 iv. 45-49.〉と歌い、小唄や端唄を、

ベスはベルより上手に――

と歌い、こんな風に、なんでも詩に書かねば気が済まないのである。

君、サンザシの生垣のスイカズラよ、  
わが誓いの心を、クピドの酒杯で受け取っておくれ、  
愛しいシスよ、わが心の貴い血が君への一杯。  
グビン婆さんの飲み屋のエールを全部集めただけの価値ある一杯。  
これ以上は言うまい、情事がわれに行けと呼ぶ、  
父さんの馬はまぐさを食べようと動かないのだから。  
君、わがクレッセトライト夫人になってくれ  
われは君のトロリ・ロリ卿になってみせよう。  
急いで書き終えたら、わが愛しのクリンサクラよ、さらば、  
日曜日、居酒屋できっと会おう。

[サミュエル・ローランド 〈『頭部血管の体液の瀉血』〉]

あなた方の厳しいストア派や厳格な哲学者たちも、この情念に溶け去るだろう。もしアテナイオス [[『食卓の賢人たち』 第13巻 〈567A.〉] が偽りを言っているのではないなら、アリストテッポスもアポロドロスもアンティパネスも、自分が愛する人を褒め讃えて愛の詩や覚書を創り、雄弁家たちは書簡を書き [例えばブッテ『文箱』 33. 「恋人マルガレタについて」 〈メルキオル・ウェルトウキウス宛〉 や、ペロアルドなど]、王侯たちは称号と栄誉を与えたではないか。クセルク



セスはテミストクレス・ランプサクスに葡萄酒を、マグネシアにパンを、ミュンテにはその他の食物を見つけてくれるようにと書簡を書いた〔アンリ・エティエンヌ『ハリカルナッソスのヘロドトスの歴史』〕。ペルシアの国王たちはすべての都市を同様の用途に供した。この国は頭飾りを、その国は首飾り、あの国は髪飾りを女性に与える〔キケロ『ウェッレス弾劾』〈第2回公判弁論〉第5演説〈正しくは第3演説〉33. 70.〕。アハシュエロスは帝国の半分をエステルに与えたであろうし〔『エステル記』5, 〈7.〉〕、ヘロデはヘロデヤの娘に「願うものを与えよう」と願うものを尋ねた〔『マタイによる福音書』14. 7.〕。カリグラは彼の高級娼婦に十万サステルス与えた。最初の言葉では彼女の飾りピンを買うためであったのだが、元老院から共和国のためローマの朽ちた城壁の修理のため何某かを供出してほしいと懇請されたとき、せいぜいのところ六千サステルス差し出したものであった。かのシチリアの僭主ディオニュシオスは、彼の枢密顧問官をことごとく拒絶して、彼のお気に入りで想い人のミラにとても執心していたので、公職は果たさず、彼女の特別な助言なしでは何も為さず、彼女の同意なしでは、どんなに有能で有用でも、王国のもっとも重要な職務に、誰かを抜擢したり、罷免したり、派遣したり、饗応したりすることはなく、また彼女が推薦すれば、どんなに相応しくなく、無価値であってもおおいに同意した〔ルンドルフ〈『市場また市場』〉第26論「恋する人について」〕。国王や皇帝は詩ではなく都市を創るのだが、ハドリアヌスは、アンティノオスを讃えて星座や、神殿、祭壇、彫像などのみならず、エジプトにアンティノポリスを創り、アレクサンドロスは彼のヘファイステイオンを未来永劫顕彰するために、無限の金額を与えた〔ブルタルコス『対比列伝』「アレクサンドロス」72.〕。ソクラテスは、自分自身が芸術や学問に無知な愛の奴隷、愛のことどもだけの学者と公言し、「他のすべての物事の知を拒むとき、この愛の痛みの学者となる……」〔『説教集』8.〕と、ソクラテスの信奉者テュロスのマクシモスは言っているが、しかもこのことを彼は、家でも外でも、公の饗宴でも、アカデミアでも、ピュラエオスでも、リュケイオンでも、プラタナスの下でも、公言していて、まさに称号を与えられているように、美の猟犬である。しかし、私は結論として、愛の症状には果てがない、それは底のない淵、愛はいかなる局面にも従属しない、いかなる技でも手段でも査定することはできないと言おう。さらに、私は、「誰も、自分自身が経験したことのない、愛の事柄については語るができないし、正しく判断することもできない」〔『愛の蔑視』第1巻〕と言うカブレット、あるいはまた「自らも少なからず溺れ、狂い、恋煩いに陥った」と付け加えるエネア・シルヴィオ・ピッコローミニと考えを同じくする。私は初心者で、静観者に過ぎないと白状する。

愛が何たるか知らず、愛してもいない。

私ののは付け焼刃の知識、何を、偽り、装い、言い訳をする必要があろう。だが、私は人間である……〔テレンティウス『自虐者』77.〕。まったくもってこの主題に関しては玄人ではなく、恋愛の教師ではなく〔オウィディウス『悲しみの歌』1. 1. 67.〕、私の言っていることは単に読んだこと、

たぶん他人の愚行から、あるいは自分が考えたこと、また他人の言葉からである。

#### 第4節 第1項 愛の憂鬱の兆候。

いかなる熱情、苦悩、不安、嫉妬、疑念、恐怖、悲嘆、心配が、愛に陥っている者たちに伴っているのかを、私は十分に語った。次の問いは、このような悲惨さの結末はいかなるものになるのか、それらは何を予告するのか、である。ある者たちの見解によれば、この愛は治すことができない、「愛はどんな薬草によっても癒やされない」〈オウィディウス『変身物語』1. 523.〉、愛は彼らに死ぬまで伴う〔エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ〈『書簡集』114「エウリアルスからルクレティア宛の書簡」〕〕。

愛は家畜にも家畜の主人にも災いをもたらす。

〈ウエルギリウス『牧歌』3. 101.〉

そして、愛は絶えることなく続くので、どんな説得によっても、それを取り除くことはほとんどできないだろう。エリアルスが述べたように、「私に愛さぬようにさせよ、山に平野に降りるようにさせよ、川に水源まで戻るようにさせよ、私が愛から逃れることができるのは、太陽が自らの軌道から外れることができるのと同じこと」〔エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ〈『書簡集』114.〉「エリアルスからルクレティア宛の書簡」〕。

そして、初めに海は魚を、山は影を、  
森は鳥を、風はざわめきを欠くだろう。

次いで、美しいアマリスの火が私から消えるだろう。

〔ブキャナン『シルウァエ』〈3. 90-92.〉〕

私に愛さぬようにさせよ、耳の聞こえぬ者に聞くように、眼の見えぬ者に見るように、話すことができぬ者に話すように、脚の不自由な者に走るようにさせよ。助言は役に立つこと叶わず、病人は愉しみを味わうことができない。いかなる薬も私を治すことはできない。

万人を助ける技芸は自らの親方を助けることができない。

アポロンが告白したように、そして、ユピテル自身が治されえなかったように。

人間のあらゆる苦しみを医術は治す。

愛だけが病気の専門家をもたない。

[プロペルティウス〈『詩集』〉第2巻第1エレジー〈57-58.〉]

しかし、愛を治すことができるかどうか、そして、いかなる手段によって治すことができるかは、然るべき箇所では説明されるだろう。当座のところ、もし愛がそのまま進み、治されも矯正もされなければ、しばしば常軌を逸した驚嘆すべき結果を引き起こす。タティオス〔〈『クレイトンとレウキッペの話』〉第2巻〈3.〉〕が述べているように、「アモルとリベル〔バックス〕は激烈な神で、魂を激しく燃やして、慎み、恥ずかしさ、礼儀「を忘れさせる」。この気質に完全に囚われている人々は、通例、「無分別で、正気を失った者」になる。というのは、詩人がそう呼んでいるように、それは我を忘れた「狂気じみた愛」〔ウエルギリウス『牧歌』第3歌〈正しくは第10歌44.〉〕だからである。そして私が証したように、野獣同然となり、非理性的で、痴愚で、強情で、神や人間への恐れを欠き、しばしば偽証し、浪費し、窃盗し、近親相姦、強姦、姦通、殺人を犯し、自らの欲望を満足させて町や市や国の人口を減らす。

これは悪魔であり、異教徒、ユダヤ人、トルコ人が  
けっして為さなかったような害悪をもたらす。

[R. T. 〈ロバート・トフト『嫉妬の紋章』〉]

トロイの戦争がその十分な証拠だろう。そしてアッピアノス『ローマ内乱史』第5巻〈1.〉が、アントニウスとクレオパトラについて語っているように、「彼らの愛は彼ら自身を、そしてエジプト全土を極度の悲惨な厄災へと導いた」。彼女の終わりはニガヨモギのように苦く、両刃の剣のように鋭い。〔『箴言』5. 4-5.〕。「彼女の足は死へ降りてゆき、彼女の歩みは地獄へ」〔『箴言』(5. 4-5.)〕。「彼女は死よりも苦い」〔『伝道の書』7. 28.〕。「そして罪人は彼女によって捉えられるだろう」〔『伝道の書』7. 28.〕。

愛に突き落とされた者は、岩壁から跳んだ者よりも酷く傷つく。

[プラウトゥス〈『三文銭』265-66.〉]

岩壁の先端から真っ逆さまに落ちる者も、愛の深淵に陥る者ほど酷い状態ではない〔アウグスティヌス『神の国』第2巻第28章〕。というのは、プラティナ〔『愛に抗する……対話』〕が述べているように、そこから後悔、自暴自棄、毫碌が生じ、彼らは自分自身を失い、自らの分別を失い、そして自らの運命をすっかり難破させるからである。狂気は、彼ら自身と他の者たちを破滅に導く、狂暴な死である。ベルナルド・ド・ゴルドン〈『医学の百合』2. 20.〉が述べているように、「予後は以下のとおり。もし彼らに治療が為されなければ、彼らは狂気に陥るか、あるいは死ぬであろう」〔サヴォナローラと多くの者たち、ユウエナリス〈『諷刺詩集』6. 428.〉も同じことを述べ

ている]。というのは、エリアーニョ・モンタルト [〈『病理学大全』5. 1. 「英雄的愛について」〕が述べているように、もしこの情念が続くならば、「それは血液を熱く、濃く、黒くし、そして、もし興奮が脳に入り込み、不断に沈思させ、覚醒させるならば、それは脳を干上がらせ、その結果として狂気が生じるか、あるいは彼らは自ら死に至るだろう」。

おお、コリュドンよ、コリュドンよ、いかなる狂気がお前を捉えたのか。

[ウエルギリウス『牧歌』2. 〈69.〉]

ところで、アルナルドゥスが付け加えているように、もし情念をただちに和らげなければ、すぐさまこのような諸結果がもたらされ、「彼らは思い焦がれ、狂気に陥り、突然死ぬだろう。」パスコン・ド・タラント『摘要』1. 10.〉が述べるように、「もし治療されなければ、すぐに狂気に陥るだろう」。

ああ、辛い頸木をもつ者はみな

自らが死ぬと気づくことなく死ぬ。

[カルカニーニ〈「クインティアの墓に」11-12.〉]

このように、その詩人において、彼女は自分自身について告白する。

——誰も気づかぬうちに、私は狂うだろう。

私が狂気を免れているのは、ほんの髪の毛の分だけだ。

[テオクリトス『牧歌』14. 〈9-10.〉]

そのように、オランダはアンジェリカに狂い、あるいはヘラクレスはヒュラスに狂う。

そして彼は、怒り狂って、足が運ぶままに突進していた。

なぜなら、あの残酷な神が、彼の内部で肝臓を切り裂いていたからだ。

〈テオクリトス『牧歌』13. 70-71.〉

ヘロを見て、いかに何人の者が狂気に走ったのか、私は語るができない [ルキアノス『絵画論』]。

別の者は、傷を隠して、少女の美さに狂う。

[ムサイオス『ヘロとレアンドロス』84.〉]

たとえば、精神病院に行くがよい。どこの村でも、多くの者たちが愛ゆえに死んだり、自分から進んで死を選ぶことは、とてもよく知られているので、私はそれを証明するために多くの労力を費やす必要はない。「この愛には、死以外に終わりも安らぎも見いだされぬ」[オウィディウス『変身物語』10.〈377.〉]。このような人々にとって、死はごく普通の破局である。

私は死ぬことになるだろう。なぜなら、この手段以外に  
かの苦悩から解放されることはないのだから。

[アナクレオン〈『オード集』25.〉]

エウリアルスが老人たちのもとから立ち去るや否や、彼の恋人のルクレティアは、「けっして眼を上げず、いかなる冗談も彼女の悲痛な心を和らげることはできず、いかなる楽しみも彼女の傷つき悩む魂を慰めることができず、すぐのちに彼女は病気に罹り、死んだ」[エネア・シルヴィア・ピッコローミニ〈『書簡集』114.〉]。しかし、これは穏やかな死であり、自然な死であり、こうした人々は普通、自ら死に向かう。

——自分自身の血の噴出に歓喜し、  
驕り高ぶった魂を虚しい空中に注ぎ出す。

〈テオドレ・プロドロムス『愛の歌』6.〉

そのようにデイドもおこなった。

しかし死のう、と彼女は言う。そして、こうして黄泉へと赴かせよ。

〈ウエルギウス『アエネイス』4.660.〉

ピュラモスとティスベ、メデア、コレソスとカリロエ [パウサニアス〈『ギリシア案内記』第7巻「アカイア地方」〈21.1-5.〉]、哲学者テオゲネス [ルキアノス『全集』第4巻〈『カタプロス、すなわち僭主』6.〉]、さらに加えて、何百万人の者たちが、常にそのようにおこなうだろう。

——だが私には強い

手と愛がある。この愛が殺傷への力を与えるだろう。

[オウィディウス『変身物語』3.〈実際は4.149-50.〉]

数ある痛ましい物語の中でも、

ロミオとジュリエットの物語ほど痛ましいものを聞いたことがあろうか。

〈シェイクスピア『ロミオとジュリエット』5.3.309-10.〉

パルテニオスの『愛の情念について』と、ブルタルコスの『愛の物語』を再読されたい。これらはすべてこの目的へと向かっている。ヴェルリオラ〈『医学症例集』第2巻第7所見〉は、彼の患者である一人の商人について悲しむべき話を語っている。「彼は耐えられない愛が原因で錯乱しており、もし監視されていなかったならば、たちまち、自分自身に危害を加えていたであろう」。ロドリゲス・デ・カストロ・ブランコは『百の治療集』第4巻第56症例で〔若いユダヤ人〕の別の話を語っている。そしてフェリクス・プラタは『医学所見集』第1巻において第3番目に、医学を修めた若い貴顕の話を語っている。彼は医師の娘に恋したが、自らの欲望を達成する望みがないので、自ら毒を飲んだ。1615年に、フランクフルトの理髪師は、彼の恋人が別の男と婚約したので、自分の喉を切った〔ゴタルドゥス・アルトゥス〕。ニューバーグでは同年に、ある若い男が相手の両親の同意を得ることができなかったので、恋人を殺し、その後自殺したが、行政官に対して、死んだのちは、二人が一つの墓に葬られるように望んでいた。

薪の山に残っているものは、一つの骨壺で安らうでしょう。

〈オウィディウス『変身物語』4.166.〉

それはジスモンダが彼女の父のタンクレーディに懇願したことで〔ボッカッチョ〈『デカメロン』4.1.〕、彼女は同様に、恋人のゲスカルドとともに埋葬されることを、そうして、二人の身体が墓の中で一緒に横たわっている一方で、彼らの魂はエリュシオンの「嘆きの野」〔ウエルギリウス『アエネイス』6.〈441.〕をさまようことを願った。

——悲痛な愛が無残に消耗させ破滅させた人々

〈ウエルギリウス『アエネイス』6.442.〉

をミルテの森の中で

——また、ミルテの森が

包んで覆う。だが、死のただ中にあっても、苦悩は立ち去らない。

〈同書6.443-44.〉

あなた方はまだ最悪のことを聞いていない。彼らは欲情の激発の中で自分自身ではなく、他の人々に、彼らのもっとも身近で、もっとも親しい友人たちに暴力を加える。カティリナは自らの唯一の息子を殺し、「蒼白の冥土に、雲で覆われた冥府に、闇で包まれた場所へ送った」〔サルスティウス〈『カティリナ戦記』15.21.〕、ウァレリウス・マクスィムス〈『記憶されるべき事績』9.1.9.〕。それは彼のアウレリア・オスティッラへの愛ゆえのことで、「彼女は息子が生きている間は結婚を拒んだ」からである。ミトリダテスの妹のラオディケは、彼女が愛していた卑しい男を満足さ

せるために、自分の夫に毒を盛った [コッチオ〈『歴史逸話集』〉第3巻第6章]。アレクサンドロスは側室の一人のタイスを喜ばすために、ベルセポリスに火を放ったクルティウス〈『アレクサンドロス大王の事績』〉第5巻〈7.3-7.〉。ネレウスの妻、アテネ公の未亡人の貴婦人は、ヴェネツィアの貴顕への愛のゆえに、自分の都市を裏切ったが、一方で彼は彼女への愛のゆえに、ヴェネツィアの貴族の娘である自分の妻を殺害した [カルココンデュラス『トルコ人の起源と行状について』第9巻]。コンスタンティヌス・デスポルタは、自分の妻のカタリナを退け、息子のミカエルと他の子どもたちを締め出したが、それは、テッサロニキの卑しい代書屋の娘への愛ゆえのことで、彼は彼女の美しさに魅了されたのだった [ニケフォルス・グレゴラス『歴史』第8巻]。レウコフィリアは、彼女が住んでいる都市を、敵陣にいた自分の恋人のゆえに裏切った [バルテニオス『恋人たちの情感について』第5章]。メティニアの支配者の娘、ピシディケは、父の敵であるアキレスへの愛のゆえに、全島を裏切った [同書 第21章]。ディオグネトゥスは、自分が住んでいた都市で同じことを、ポリクリタへの愛のゆえにおこなった [同書 第9章]。メデアはイアソンへの愛ゆえに、彼に火を吐く青銅の脚を持つ雄牛を手なずける方法を、そして黄金の羊毛を護っている巨大な龍を殺す方法を教えた。そして、弟のアブシュルトスの四肢を引き裂いたが、それは彼女の父のアイエテスを引きとどめて、その間に自分は愛するイアソンと逃げ去るためだった、等々。この愛という悲喜劇には、このような幕と場が存在している。

## 第5節 第1項

### 労働、食事、医術、断食等による愛の憂鬱症の治療。

愛の憂鬱症はあまりに抵抗できぬ強烈な情念ゆえ、治療可能なのかと、反駁する者もいるだろう、というのも、その強烈さは、あなた方も知っているように

——アウエルヌスに降りていくは易し

だが、歩を引き戻すこと、上空へと出てゆくことは  
かくなる難事、かくなる骨折り——

[ウエルギリウス『アエネイス』6.〈126, 128-29.〉]

そうだとしても、疑いもなく、もし間に合って治療したなら、うまくいくかもしれないし、多くの良き治療によって治癒するかもしれない。アヴィケンナは〈『医学典範』〉第3巻第1部第23、24章で、この病をいかにして緩和、改善、治療できるか、7つの簡明な方法を書き記している。サヴォナローラは〈『主要な医術』〉の9つの主たる診察を、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデは、〈『頭脳の病』第19章で〉いかにこの情念が鎮められ得るか、医術以外の8つの規律を描き、デュローランは2つの主たる教訓を、アルナルドゥス、ヴェルリオラ、モンタルト、ヒルデスハイ

ム、ヨハン・ランゲ、その他の人たちが、ほかの方法を伝えるが、みな同じ目的をめざすものであった。これらの叙述の要点を簡潔にまとめよう、そして（私は自分の蠟燭の火を彼らの松明から取るのだから）折に触れて、私にとって最善と思えるように、しかも自分自身の仕方で、もう一度広げて述べよう。この執拗で抑制のきかない情念を抑えるのに注目すべき第一の規制は運動と食事である。「ケレスやバッコスがいなければウェヌスは活気を失う」〈テレンティウス『宦官』732〉は古くからのよく知られた金言である。何もしないでいがちの生活〔「閑暇は純潔の難破」（アウグスティヌス〈『説教』16.）〕、気ままな食事は憂鬱症の大きな原因であるように、その反対の労働や少なめのつましい食事に、絶えず用のあることが、憂鬱症を避ける最善でもっとも普通の方法である。

もし、あなたが怠惰を棄てれば、クピドの技は減し、  
松明も蔑まれ、光もなく下に置かれたまま。

〈オウィディウス『愛の治療法』139-40.〉

ミネルヴァ、ディアナ、ウェスタ、それに9人のムーサたちは決して恋に落ちはしなかったが、それも彼女たちには閑暇などなかったからである〈ホメロス「アプロディテ讃歌」7-32、ヒルデスハイム『拾遺集』による〉。

あなたたちは、彼女たちに甘言を弄しても無駄だった、  
彼女たちを放縦に誘っても無駄だった、  
彼女たちを悦楽へと導いても無駄だろう、  
彼女たちには、誘惑と不謹慎も、  
溜息と口づけと囁きも、  
愛する者たちの正気を逸した心を  
媚薬によって陶酔させるどんなものであっても。

[ブキャナン『十一音節詩集』〈4.16-22.〉]

忙しくしている者を襲っても無駄である。「多くの大いなる仕事に専心すること」というのがサヴォナローラの第3規律〈『主要な医術』〉であり、アヴィケンナの教訓第24章である。

愛は仕事に屈するのだから、仕事に勤しみたまえ、さすればあなたは安全になる。

[オウィディウス『愛の治療法』第1巻〈144.〉]

常に忙しくしていること、しかも可能ならグアイネーリオが享受しているように重大事に関わることである〔〈『処方』〉第16章〈正しくは第15、6章〕〕。マイノ・デ・マイネリは「決して怠



惰であってはならない、ただし睡眠時は除いて」[『健康指南』第2部〈正しくは第3部〉第23章]と付け加えている。

——それから、もし

あなたが夜明け前に書物と灯りを求めないのなら、もし  
魂を勉学と高貴な事どもに向けないのなら、  
妬みや愛によって惨めにも苦しめられることになろう。

[ホラティウス『書簡詩集』第1巻第2書簡詩〈34-37.〉]

真面目に一心に、常に忙しくしていること以上の良い治療はない。

この疫病が貧しい住居を襲うことはまれで、  
豪華な邸宅を選ぶのはなぜでしょうか。  
並みの民衆が健全な情愛を宿しているのはなぜでしょうか。

[セネカ『ヒッポリュトス (パエドラ)』〈209-10, 212.〉]

なぜなら、貧しい人たちはつましく暮らし、懸命に働き、粗末な衣服をまとい裸足で歩くからである。

貧乏には、自分の愛を養う糧がない。

[オウィディウス『愛の治療法』〈749.〉]

それゆえグアイネーリオは、「寒い気候に、肌じかに毛でできた衣で過ごし、素足に脚もそのまま歩き、修道士のように時にわが身を鞭打ち、とくに断食をする」[〈『処方』〉第16論攷第18章]彼の患者のことを描写している。多くの大食漢がしているように、肉など食べていない顔をしようと、どんなふりを装うとも、芳醇な葡萄酒や羊肉やポタージュを絶っただけというのではなく、あらゆる種の食事を絶ったと。絶食は、それ自体完全に十分な治療法である。というのもヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデが考えているように、自由気ままに食べ、気楽に生活している人たちの身体は「悪いスピリトゥスや悪魔、邪悪な考えに満ちていて、そういう人たちには、断食以上の治療はない」〈『頭脳の病』19.〉。ヒルデスハイムは、この断食に「しばしば沐浴をし、よく運動をして発汗すること」(『拾遺集』2.)を加えるが、なにより空腹や断食を認めている。「この手の悪魔は断食か祈りでしか退散させられない」〈『マタイによる福音書』17. 21.〉というのが、われらが救世主の言葉であり、これが教父たちを極端な断食の推奨に走らせる。アンブロシウスが言うように、「空腹は処女性の友、好色の敵であるが、満腹は貞節を打ち負かし、あらゆるあり方の刺激を助長する」[『説教集』〈37.〉「大食について」]。もし、お前の馬があまりに強壮す

ぎるなら、まぐさを少し控えよと、ヒエロニムスは助言する。この方法で、かのパウロ、ヒラリウス、アントニウスや、著名な隠者たちは、肉の欲望を抑え、この仕方ではラリオンは自分の驢馬——と自分自身の肉体を呼んでいるのだが——に、悪魔がどんな邪悪な行為を唆したときでも、蹴るのをやめさせた（と、ヒエロニムスが、伝記の中で彼について語っている『『聖ヒラリオンの生涯』第3巻〈正しくは第5巻〉「書簡」』。この仕方では、かのインドのブラフマンたちは禁欲を保ち〔ストラボン『地誌』第15巻〈1. 59.〉〕、スコットランド、ハイランド地方の人々がヒースの上に寝たように、床に何も掛けずに寝、つましく一皿だけの食事をとったが、グアイネーリオは、いつも若い人たちにこれを実践させた（『処方』第16論攷第18章）。そしてド・ゴルドンは、もしこれが功を奏さなければ、「したたか鞭打ったり、意気喪失させるために牢獄に閉じ込め」〔『医学の百合』第2章第2節〈正しくは第1章第20節〉〕、そこで、彼らが自分たちの過ちを認め、心を入れ替えるまで、パンと水だけしか与えなかった。もし牢獄収監や空腹が彼らをうちのめさなければ、かのテーバイのクラテスの指南に従って「時が終息させるはずだが、時ができなければ、最後の頼みの綱は絞首索である」〔ディオゲネス・ラエルティオス〈『ギリシア哲学者列伝』第6巻第5章〈86.〉〈おそらくヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデの散文による〉〕。これは滑稽な書き方だとあなたは言うだろう。それにもかかわらず断食は今なおぜひとも使わねばならないが、先に書いたような、好色を引き起こし性欲を掻き立てる食事を控えなければならないように、その反対の食事をしなければならない。若い人たちは葡萄酒もまた避けなければならない（オウイディウス『愛の治療法』805.）。プラトンも同様に処方していて、為政者にこそ葡萄酒を控えさせようとし、例を挙げると、この種のことに於ける節制をカルタゴ人たちに強く薦めている〔『法律』3.〈正しくは2. 674A. など〉〕。葡萄酒の抑制は良い命令で推薦に足るものであった。ある神話詩人たちが、葡萄酒が最初巨人族の血から湧いて出たと言いつつ立てたため、古代エジプト人たちが葡萄酒を控えたというような不穏な観点から、あるいはまた現代トルコのように迷信から為されたのではなく、葡萄酒は「魂への毒、悪徳への火口」で、飲みすぎると愛欲の疫病そのものにほかならぬゆえ、節制のために為されたのである。この理由で、老齢の女性には、暑い国々では葡萄酒の摂取は禁じられていた。〔ゲッリウスの〈『アッツェティカの夜』〉第10章第23章によれば〕葡萄酒の摂取は姦通と同様に厳しく罰せられたと書き、若者にもそうだったと、レオニチューノは『さまざまな物語について』第3巻第87、88章で、アテナイオスその他から引いて述べている。またそれはイタリアなどのヨーロッパや、アジアの国々で、今でもおこなわれていると、クロード・ミノーがアルチャート〈『エンブレム集』〉の第23エンブレムの註解で巧く説明している。ゆえに選択は他の食事では為されるべきである。

それにも劣らず避けるべきは、催淫性のルッコラと、  
何であれわれらの肉体を愛欲へと向かわせるもの。

〈オウイディウス『愛の治療法』799-800.〉

供すべきでない食事は胡瓜、メロン、スベリヒユ、睡蓮、ヘンルーダ、スイカズラ、芹、レタスで、愛欲を避ける目的のために、これらを、レメンスは〈『自然の隠された驚異』第2巻第42章で、またミゾーは『医学必携』で大いに推奨している。マイノ・デ・マイネリが言うイタリアニンジンボクまたの名を貞操木は、他のものにまして素晴らしい効果をもっている〔『健康指南』第3部第23章〕。テスマフォリアという聖なる祭りでは、かのアテネの女性たちが9日間、男性と交わることを慎まなければならない、アイリアノスによれば、その間はハネア〈アグノスの間違いと思われる〉と呼ばれた薬草をベッドに置き、あの燃える愛欲の炎を鎮め、激しい情欲の苦痛から身を守った〈『動物の本性について』9.26.〉。さらにポルタ〈『自然魔術』〉、マッティオーリ〈『ペダニウス・ディオスコリデスの医薬剤についての著書への注解』〉、クレスチェンツィ〈『農学全書』第5巻等々、何より薬草学者、そして医者を書いた異常性欲や勃起持続症の章をあまねく参照していただきたい。他に名を挙げるなら誰よりもラーゼスである。場合によっては、もう一度言うが、もし、たいそう気持ちが消沈して身体的にも落ち込み、苦しみや悲しみや自分の惨めさをひどく感じてしまう気持ちに、いまにも絶望してしまいそうなら、一杯の葡萄酒と十分な食事は悪くはない。またバラスコン・ド・タラントが助言するように、誰か善き女性とともにあるならば、性の歓びを増すもので、そのことについてヨハン・ランゲは『医学書簡』第1巻第24書簡で、ラーゼスから「情交が打ち続くように誘う」と引いて同意し、グアイネリオは『処方』第16章第16論攷で、それを非常に有効な治療だと支持した〔デュ・ローラン〈『視覚疾病、憂鬱症、カタル、加齢等に関する対話論議』第11章に同文〕。

——お前の股間が膨れあがれば、もし、  
女中か奴隷が近くにいたなら、情欲に突き動かされたいと  
お前は思うのか。私は違う。なぜというに……

[ホラティウス〈『諷刺詩集』1.2.116-19.〕]

ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデは、この詩人の助言に同意して「射精はこの病を完全に取り去るか緩和する」〔『頭脳の病』第29章〕と言っている。「愛の抑えがたき欲望を鎮めるために、ほとんど毎夜娘の処女を奪った」〔ペロアルドス『弁論集』「愛について」〕アハシエロスの燃える欲情を和らげたようにである。断続的に酔っぱらうこともまた効果的だと言っているが、これは、たとえ認められるとしても、間違いじみた処方である。もし認められないとしても、ビベスが『靈魂について』第3巻で語っていることのように、何らかの快楽は許されるはずである。彼曰く、「何も手につかず、我慢できず、いわば自己喪失に陥った恋する者は、旅人のように、音楽やご馳走、そしてもし、心を鎮めるために多くの人が推奨しているように、泥酔が必要なら、上等の葡萄酒で、家に呼び戻されなければならない。あらゆる種の娯楽や楽しみごと、美しい絵や掛け物、建物、心地よい草地、果樹園、庭園、木立、大小の池、川を見ること、釣り、鷹狩、狩猟に、愉快なお話や楽しい談話を聞くこと、読書、汗をかくまで運動することで——スピリ

トゥスが新たになって訪れるために——、あるいはまた、なにかしら熱烈な感情が正反対の情念で——気持ちを転じて、怒りや猜疑心、煩悶などからすっかり連れ去られ、違う道への習慣が身につくようになるために——呼び戻されなければならない」。(センプロニウスが恋煩いに陥った、彼の師カリストに助言するように)「楽しい会話をもちかけたり、馬鹿馬鹿しい語りや、でたらしめの話、甘美な物語、すてきなお喋りを繰り返して、顔を合わせて戯れる人が、いつもあなたのそばにいるだろう」〔〈ロハス〉『セレスティーナ』第2幕バルト訳〈『ポルノボスコディダスカルス』〉。また音楽の旋律や愉しさ、歌唱、舞踏が、ある種の恋する者たちの情熱を増加させるが、他の恋する者たちにおいては、情熱を追い遣りもし、非常に善き結果ももたらす、とアヴィケンナが〔〈『医学典範』3.1.4.〉第23章で記している。当事者の症状はさまざまで、これらの効き方もさまざまなので、慎重に処方されなければならない。

もし、体液を変えるとか新たなものを加えるとか、何らかの治療が必要であれば、その人たちは憂鬱症患者として治療されなければならない。シャルル・ドゥロルムは、フランスのモンペリエ大学での学位のために、その他の問題のうちでも、「恋人と狂人は同じ治療法で治癒するか」について議論した〈『アポロンに捧げる第二の月桂樹』所収〉。これについて彼は肯定しているが、それは愛は長引けば単なる狂気と同じだからである。ゆえにこのような医術は、処方されているように、内的なものも外的なものもあり、これらについては、憂鬱症の治療についての先の第2部で扱われたとおりである。ヴェルリオラの『医学症例集』第2巻第7症例、ルイス・メルカド『婦人病論』第2巻第4章、ゼンナート〈『医学診療』〉第1巻第2部第10章、フランス人のジャク・フェランの『愛の憂鬱症』、フォレスト〈『診察』〉第10巻第29、30診察、また、特別な処方についてはヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ〈『頭脳の病』〉その他を参照していただきたい。アマトゥス・レシタヌスは愛ゆえにほとんど気が狂った若いユダヤ人を、ヘレボルス汁や、その他、通常黒胆汁に処方される排出法や浄化法で治療した〈ヒルデスハイムに拠る〉。アヴィケンナは、必要に応じてそのことを、そして「何にもまして瀉血を」認めている。「瀉血は恋する者たちを恋する者でなくし」、恋人たちを我に返し、平常心を保てるようにする〈『イリシ』3.1.4.23〉。これはサレルノ派、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ、ヒルデスハイムなどが処方するのと同じ、すなわち基本治療として使われるべき瀉血なのである。かの古代スキタイ人には両耳の下からの瀉血という、燃える欲情の欲望を治し、男性も女性も不妊にさせる策があったと、コッチオが『歴史逸話集』で述べている。それは今なおインド人たちのあいだでは使われていると、ザルムートがパンチローリの『新発見』についてのコメント第10題「時計について」で、メルクリアールがヒポクラテスに基づいての『講義集』第3巻第7章で、それにベンゾーニが〈『新世界の新事実』〉で語っているが、その理由については、ランゲが〈『医学書簡』〉第1巻第10書簡で解説している。

愛欲を鎮める治療として施されるのは、たとえば……（ある人が言っているのだが）「女性の外陰部や臀部に塗布された乳化した樟脳は陰茎を軟弱にする。高貴な娘がこの病と闘っていたが、その娘に医者、なかでも、たくさんの穴をあけた鉛板を背中に二十日間背負っておくべしと処方した。また、精子をすっかり乾燥させるために、彼女にできるだけ食べ物を控え、コリアンダー

や、レタスやスイバの種子を嚙んで摂取できるようにせよと命じ、このようにして彼女を病から解放した」。さらに柳の葉をすりつぶして飲めば、性交を妨げ忌避させる。しかも、それが幾度も用いられれば、完全に病を取り除くことになる。指輪につけたトパーズや、すりつぶして薔薇油や薔薇水につけた狼の右の睾丸は、性愛への忌避を引き起こすとアレッサンドロ・ベネデッティが述べている（『医学事象』、ヒルデスハイムに拠る）。攪拌したバターに混ぜたミルクや大麻の種子や樟脳を用いても同じ効果を得る。クマツヅラの葉や、頭を切断して乾かした蛙の粉を身に着けていると性欲を消す。性交を抑制するには、性器や腰部や恥毛にテーバイの阿片を溶かした水を塗布すればよい。樟脳は性欲をもっとも抑制し、乾燥コリアンダーは性交を不可能にし、勃起を妨げる。芥子を大量に飲むのも同じ効果をもたらす。「クマカヅラを一口与えよ、そうすれば6日間、陰茎は勃起することなく、乾燥ミントに酢を混ぜて使ったり、ヒヨスやドクニンジンの汁を性器に塗れば、性欲を抑える等々。レタス、スベリヒユ、コリアンダーの種子を1ドラクマ、乾燥ミントを半ドラクマ、白砂糖4オンスを摂取せよ、すべてが粉々にされたら、それらを睡蓮の水と一緒に混ぜ合わせ、一口大の固いドロップにせよ。これらの一つを朝、起床時に摂取するがよい」。これらについての、ほとんど数えきれない同様のことを、ヒルデスハイム、ミゾー、ポルタ、その他によって、すでに述べられた箇所から搜していただきたい。

## 第5節 第2項

発端に逆らうこと、機会を避けること、場所を変えること。

公正な手段と不正な手段、相反する情念、機知に富む術策とともに。

別のものを取り入れ、先のものを退けるために。

他の適切な規則や教訓が、我々医師によって享受されている。それらは単独では効力を発揮しないが、結び合わされると、たしかに大きな効力を発揮する。それらの最初のもは「発端に逆らうこと」〈オウィディウス『愛の治療法』91〉である。「最初に逆らい、愛を退ける者は、勝利者となった」[セネカ〈『ヒッポリュトス（パエドラ）』132-33.〕。バルダッサール・カスティリオーネは〈『宮廷人』〉第4巻において、この教訓をとりわけ勧めている。彼はこう述べる。「彼がたまたま、卓越した人柄で上品に振る舞う女性に出会い、この美しい姿を引き入れ、それを自らの心にもたらそうとする、ある種の欲望を湛えた彼の両眼に彼女は気づいていた。そして、彼が自分自身の中で作用しているこの影響力によって点火されたことを悟ったとき、そして、かの繊細な精気が、彼女の眼で輝いて、炎をさらに燃えあがらせるのを見てとったとき、彼は賢明にも、発端に逆らい、ほとんど自分を失っていた理性を蘇らせ、彼の心をあらゆる手段によって強固にし、心に通じるあらゆる通路を遮らなければならない」。これは、すべての者が同意している教訓である。

急な病の悪しき種子が新しいうちに潰しなさい、

できうるときに、最初の敷居で足を止めなさい。

[オウィディウス『愛の治療法』第1巻〈81, 80.〉]

それをもっとも迅速に可能とするのは、彼が自らの悲哀と情熱を思慮深い友人に告白することであり（というのは、黙って燃えあがる者はいつそう身を焦がす [エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ〈『書簡集』114「エウリアルスからルクレティア宛ての書簡」]）、その友人は適切な助言によってすぐに彼を癒やすだろう。そして、この助言は彼の病を重くするような機会や状況を避け、あらゆる手段を用いてその対象を取り除く。火の傍に立って、自身を焼かない者がいるだろうか。

[門よ] どうか飛び跳ねて、彼女を愛する哀れな

私の生き血を吸うあの女を、家の外に放り出してくれ。

[プラウトゥス『クルクリオ』〈151-52.〉]

それゆえ、彼女との交際をいっさい慎むのが望ましく、そのことはヒエロニムスがパウラとネポティアンに向かってきわめて詳しく論じており、クリュソストモスが『愛妾をもつ者たちへの説教』においてきわめて熱心に教え諭し、またキプリアヌスその他の多くの教父たち、『シラ書（集会の書）』第9章、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ、サヴォナローラ、アルナルドゥス、ヴェルリオラ、そしてこの問題を取り扱っているあらゆる医師も同様である。トゥルーズのグレゴワール [『驚嘆すべき術の大全』第2書第4巻第10章] が勧めているように、「接吻、戯れ、すべての会話、贈り物、恋文など」を避け、あるいはカスティリオーネが〈『廷臣論』第4巻で勧めているように、彼女たちと会話し、彼女たちが話し、歌うのを聞くことを避け、（キプリアヌス曰く「バシリスクが出すシューシューという音を聞く方が耐えられる」 [『聖職者たちの独身について]）、また彼女たちの存在を意識させる「あの愛らしい微笑、驚くべき優雅さ、そして甘美な仕草」を避けるだけではいけない。

いつものように軽く咬みながら抱き合わないようになさい。

そして、胸をそっと揉むことは

控えなさい。――

[リプシウス『古代の著作の註解』第3巻〈1.〉「庭園の規則」]

さらに加えて、すべての会話、名前と呼ぶこと、言及すること、あるいは彼女たち、また他の女性たち、人々、状況について考えること、そして想い起こさせる機会を与える恋愛本や物語を避けなさい。プロスベル [〈フィチーノ『三重の生について』第3巻「天上から生を得ることについて」第6章] は若者たちに『雅歌』を読まないように、そしてほかのときに、『創世記』のいくつかの箇所を読まないように勧告している。恋に陥った者たちには、上記のように、名前に言

及することなど、そしてとりわけ、全身を見ることが禁じられている。彼らは彼女らに近づいてもならないし、眺めてもならない。

そして、その像を避けるべきであり、そして、愛を養うものを遠ざけ、心を別のものへと向けさせるべきである。

〔ルクレティウス〈『事物の本性について』4. 1063-64.〕〕

『シラ書（集会の書）』第9章5、7、8行が述べるには、「乙女を見るな、おまえの眼を美しい女から転じよ」。ダビデが述べるには、「眼を逸らせ」〈『詩篇』118, 37.〉。もしおまえが彼女たちを見るならば、（フィチーノが勧告しているように〈フィチーノ『プラトン「饗宴」註解』7. 4.〉）おまえの眼を欲情に集中させるな、他の者にもまして彼女に執着させるな。というのは、プロペルティウス〔『詩集』第3巻10〈第3巻21. 4.〉〕が主張するように、「愛自体が自らを養う最大のもの」だからである。愛は雪だるまのように、見ることによって自らを増大させる。しかし、ヒエロニムス〈『書簡集』5. 5.〉がネポティアンに述べるように、「一様に愛せよ、あるいは一様に無視せよ」。ヨブ〔『ヨブ記』31. 〈1-2.〉〕がおこなったように、「汝の眼と契約を結べよ」。そしてもっとも安全な手段とは、彼女たちにはまったく関わらずに、何も見ないことである。ペトラルカ〔『わが秘密』〕第3対話「この世を蔑視することについて」が主張するように、「愛は見ることによって」、もっともすばやく再生し、「再び苦悩を募らせる。華麗さが野望を、黄金を見ることは貪欲さを更新するように、美しい対象はこの激しい欲情を燃えあがらせる」。

そして、ほとぼしる水は喉の渇きをいっそう掻きたてる。

〈オウィディウス『愛の治療法』632.〉

飲み物を見ると喉の渇きが生じ、食物を見ると食欲が昂じる。したがって、見ることは危険である。ある若い紳士が戯れに、どうしても自ら仕える奥方の衣服を着たくなり、ひとりで外を歩いていると、彼を垣間見たある求婚者たちが、彼が表した女性さのゆえに、彼を連れ去った〔大セネカ『論争の書からの抜粋』第2巻第9論争〕。とりわけ、もし彼が以前に恋に陥っていたならば、彼は想い人を見ると新たに興奮し、その後は何日も何日も夢中になる。

——ごく小さいな原因も弱い者を傷つける。

消えかかっていた灰も硫黄に触れるならば、

火は盛り返し、小さな火でも大きな火になるように、

そのように、愛を復活させるものを何であれ避けなければ、

何ものでもなかった炎が再び燃えあがるだろう。

〔オウィディウス〈『愛の治療法』730-34.〕〕

あるいは、かの詩人オウィディウスが愛を「風に吹かれる」[『変身物語』7. <79-81.』] 灰の中の残り火に喩えているように、疥癬にかかった頭はすぐに壊れ（と諺にあり）、渴いた木はたちまち燃える。そして、もし彼らが以前に見て傷ついていたならば、彼らは見ることによって燃えあがらないことがどうしてできようか。イズメネオスは自分自身のことを十分に認知している。彼は長い間不在にしている、自らの想い人のことをほとんど忘れていたが、「彼女を一目見ると、火の中の麦藁のように、私は新たに燃えた、それも以前よるものはるかに激しく燃えあがった」[エウスタティオス <『恋するイズメネとイズメネオス』第3巻]。カリクレアも同様に、愛するテアギネスが長く消息を絶っていたあとで、彼を見て心を動かされた [ヘリオドロス <『エティオピア物語』第4巻 <4.』]。メルティラはアリストエネトス [『恋愛書簡集』第2巻 15. <正しくは 16.』] の中で、パンフィロスを二度と愛さないと誓い、彼が不在の間は、自らの情念を抑えていたが、次に彼が眼の前に現れると、抑制することができずに、「激しく抱擁して触れられることを許した」。彼女は自らの誓いを破り、彼を激しく抱擁した。若者のヘルモニトスは（同じアリストエネトス [同書 第2巻 4.] において）、まったく移り気で、彼の想い人をすっかり忘れて、友人たちによって愛からしっかりと引き離されていた。しかし、たまたま彼女を見て、「古の炎の痕跡を認め」<ウェルギリウス『アエネイス』2. 23.』、すっかり夢中になり、「彼女はあたかも明るい星のごとく輝き始めた」、あるいは彼女は天使のように彼の眼に映った。そして、このようにして打ち負かされるのは、すべての愛する者たちに共通の情念である。この理由のために、おそらくアレクサンドロスは見ることによって生じる不都合と危険を察知していたので、「彼は、ダリウスの妻がその美しさのゆえにきわめて賞讃されているのを聞いたとき、彼女が彼の眼の前に来るのを許そうとはしなかった」[クルティウス <『アレクサンドロス大王の事蹟』第3巻 <12. 6-26.』、実際はアテナイオス『食卓の賢人たち』13. 603C. に拠る]。というのは、プルタルコスが言うように、「美しい女性を見ることがもっとも危険である」<サンドバッパ編『プルタルコス断片集』138.、ストバエオス『説教』63. に拠る] ことを予測していたからである。そしてアレクサンドロスは他の事柄においては節度がなかったが、この点においては、「誇り高く振る舞った」。そして同様に、アラスパスはクセノポン [『キュロスの教育』<5. 1. 8.』] において、パンテアの神々しい顔について、「彼女が普通の者たちよりはるかに優って美しかったこと、それゆえにこそ彼女を見ることを望まなかった」と、キュロスに向かって讚美したのである。スキピオは23歳の若者で、ローマ人たちの中でももっとも美しく、ギリシア人のカリノス <おそらくクレニアス <クセノポン『饗宴』4. 12-15.』、あるいはカルミデス、あるいはホメロスのニレウス <『イリアス』2. 671-74.』に人品において匹敵したが、スペインのある町を攻略し、気高く、きわめて美しい若い貴婦人が彼の前に連れられてきたとき、「彼女が領主と婚約していることを聞いたので、彼女に報償を与えて恋人のもとに送った」[リウィウス『ローマ建国以来の歴史』26. 50.』]。グレゴリウスが伝えているように、聖アウグスティヌスは、「自分の姉妹と住もうとは思わなかった」[『書簡集』第7巻 39.』]。クセノクラテスは、コリントのライスと一晚を過ごしたが、彼女に触れよう



とはしなかった〈ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』4.2.7.〉。ソクラテスは、アテナイの市民全員が、彼が美しいアルキビアデスに耽溺するだろうと想像していたが、「二人きりで」〈プラトン『饗宴』217B.〉部屋に横たわる機会を得て、さらにアルキビアデスに言い寄られたとき、アルキビアデスが公に告白しているように、ソクラテスは「美しさを蔑み、高慢にも軽蔑した」[プラトン『饗宴』〈217B.〉]。ペトラルカは、いくつもの詩篇において、ラウラを讚美しているが、教皇の仲介によって、彼女が彼に与えられても、彼女についての申し出を受け容れようとはしなかった。「この愛の情念から逃れていることは大きな幸福であり、しっかり自制することができる人物には偉大な分別が示されている。しかし、あなたがひとたび愛に陥ったときに、自分自身を抑えることは（彼〈ヘリオドロス〉が述べているように）叡智の際立った徴である」[ヘリオドロス〈『エチオピア物語』〉第1巻〈正しくは第4巻10.〉]。

というのは、愛の罠にかからぬように避けることは、  
捕らえられて網から逃れること、そしてウェヌスの強い  
絆を断ち切るほどには困難ではないからである。

[ルクレティウス〈『事物の本性について』〉第4巻〈1146-48.〉]

しかし、愛から逃れている者は数少なく、自制し、情念を抑え、諸感覚を抑制して、彼女たちを見ず、淫らな眼で眺めず、会話をしないことができる者は数少ないのであるから、また、激烈な欲情という強情な情念の猛威はそれほど強く、彼らの弱点とは、カプレット[『愛の蔑視』第1巻]が述べる、「あの自然によって植え付けられた狂暴な欲望」、筆舌に尽くしがたい愉悦であるから、

神聖なウェヌスの狂気はかくのごとくで、  
こうして狂った精神を覆い尽くしているので、  
〈プロドロムス『愛の歌』7.〉

それを理性、助言、貧困、苦痛、悲惨、労苦、陣痛なども彼らから引き離すことができないのであるから、われわれはそれを、そして会話などから生じる、他のすべての不都合を迅速に正し、防御する手段を講じなければならない。最良の、もっとも速く、もっとも確実な方法は、すべての者が是認している「場所の転地」であり、彼らを各自の道へと送って、彼らが互いに聞くことも、見ることもできず、手紙をやりとりする機会もなくすること、あるいは多くのギルベルトゥス会士のように、「互いに一人で」共住することである。「祖国からの追放」というのがサヴォナローラの第4規則であり、ド・ゴルドンの教訓は、「遠い地方に分散させること」〈『医学の百合』〉である。これは、吠え声をあげるきわめて多くの獵犬のように、ほとんどの者が追求めるものであり、詩人、聖職者、哲学者、医者はずべて、「祖国を変えるようにさせよ」（デ・パリエス〈実

際はド・タラント『摘要』1. 11.))と述べている。病人のように、彼は空気を変えて治療しなければならない、とキケロは『トゥスクルム荘対談集』第4巻(35. 74.)で述べている。最良の治療法は、ヤーソン・ヴェン・デ・ヴェルデによれば〈『頭脳の病』〉そこを立ち去ることであり、デュローランによれば〈『視覚疾病、憂鬱症、カタル、加齢等に関する対話論議』〉空気と土を変えることであり、ウェルギリウスによれば〈『アエネイス』3. 44.〉「愛する岸から逃れよ」ということであり、オウィディウスによれば〔〈『愛の治療法』〉第11章(616.)〕「近所を避けるのが有用である」。

遠くへ行け、そして長い道を選んで進め。

〔オウィディウス『愛の治療法』第2巻(214.)〕

——しかし逃げよ、おまえは安全になるだろう。

〈オウィディウス『祭暦』3. 432.〉

旅行することは、愛の解毒剤である。

私は学問の都アテナイへの大きな旅に赴くことを強いられている、

長い道が私を重い愛から解放するように。

〔〈プロペルティウス『詩集』〉第3巻第20歌(現行版では3. 21. 1-2.)〕

プロペルティウスが述べているように、この目的のために私の両親は私をアテナイに送った。時と不在は苦痛と悲嘆を減らす、火が燃料の欠如のために消えるように。

眼から離れるほどに、愛は心から遠ざかるだろう。

〈プロペルティウス『詩集』3. 21. 10.〉

しかし、男女が十分に長く離れているように、まる一年を、とクセノポンはクリトプロスに命じている。「なぜなら君は、この時間のうちでは、愛から治癒することはほとんどできないだろうから」〔『ソクラテスの思い出』第1巻(3. 13.)〕。しかし、引き離すのが難しい者たちもいるだろう。これらのことすべてを、ヘインスは楽しげに、友人のプリメリウスに宛てた書簡で教えている。すなわち、最初に絶食し、次にじっと時を過ごし、第三に転地し、第四に絞首索のことを考えよ、と。もし転地、滞留する時間、不在が先に述べた救済策と伴っても愛を減じないならば、愛はほとんど取り除かれないだろう。しかし、これらのことは一般的には効力がある。フェリクス・ブラタは、彼の『症例』によれば、自分の女中への愛によって狂わんばかりとなり、手に負えなくなったパン屋の患者を診た。彼女を彼から引き離すことによって、彼はすぐに癒やされた。アッシリアの哲学者イセウスは、若いときにはきわめて放縦な生活を送り、「公然とした放蕩者」で、出会っ

た女性のすべてと恋に陥った。しかし、友人たちの助言によって、自らの研究に専心し、女性との交際を絶ったのちは、彼は一変して、もはや遊戯も、祝宴も、仮面舞踏会も、歌謡も、詩句も、上等な衣服も、そのような愛の道具を一切気かけなくなって、彼は突然、新しい人間になり、(わが著者〔ピロストラトス『ソフィストたちの生涯』〈1. 20〉〕が述べているように)「**あたかも以前の両眼を失ったかのようであった**」。ピエール・ゴドフロワは彼の〈『愛についての対話篇』〉第3の最終章において、聖アンブロシウスから、ある青年の話再録している。この者は、かつて深く耽溺した昔の恋人に、長い不在ののちに出会ったのだが、彼女にほとんど気を留めなかった。彼女は、彼が自分のことをこのように軽くあしらうのを訝しげに思い、彼を再び呼び止めて、「**優しい言葉で彼の心に訴えかけ**」(ウェルギリウス『アエネイス』6. 468.)、そして自分が誰であるかを彼に告げた。「**彼女が言うには、私なのよ、でも私はかつての私ではない**」。一方、彼も同じ男ではないと答えた。そして「**自ら立ち去った**」、デイドがアエネアスから逃れたように〔ウェルギリウス『アエネイス』第6巻〈472.〉〕。というのも、アエネアスは彼女にそれ以上語るのを許さず、自らの愚行を忌み嫌い、以前におこなっていたことを恥じ入ったからである。

私は今、かつてのような馬鹿じゃないんだ、ネアエラよ。

[ブキャナン 〈『十一音節詩集』4. 31.〉]

おお、ネアエラよ。おまえの策略をほかの誰かに用いておこなうがよい。おまえはもはや、私を欺すことはできないだろう。ペトラルカは、若い伊達男について、次のような別の話を語っている。この青年は、隻眼の女中を愛したが、その理由のゆえに、彼の両親によって遠い国々を旅するために送られた。「**数年後に彼は戻り、彼が外国へと送られた原因である女中に会うと、彼女にいかにして、いかなる機会に片目を失ったのかを尋ねた。彼女は答えた。いいえ、私は何も失っていません。そうではなく、あなたがご自身の眼を見いだしたのです**」。このことが示しているのは、愛する者たちはすべて盲目ということであり、ファビウスが述べているように〈クインティリアヌス『弁論術の教育』6. 2. 6.〉、「**愛する者たちは形姿によって判断することができず**」、何か他のものによって判断することもけっしてできず、彼らが容易に認めることになるように、しばらく離れていたり、良き助言を受けることによって、彼らが我に返ったのちには、自分自身の愚行、狂気、愚昧、盲目さに驚き、大いに当惑し、「**そして、愛について笑い、それをつまらぬ事柄と呼び**」、かつて愛に溺れて、道を踏み外した自分自身を非難し、きわめて幸運にもそこから逃れたことを心から喜ぶのである。

もし転地がこの心変わりを生みださないのであれば(それは滅多にないことだが) 正当な手段であれ、不正な手段であれ、ほかの救済策に訴えなければならない。すなわち、説得し、約束し、脅し、怖がらせるとか、あるいは、何か反対の感情、噂、作り話、流言、何か巧みな着想によって愛を逸らせ、彼の感情を変えるとか、ド・ゴルドン〈『医学の百合』2. 20.〉が述べているように、「**より大きな悲しみによって、より小さい悲しみを押し出さ**」なければならない。たとえば、彼の家

が燃えているとか、彼の親友が死んだとか、彼の財産が盗まれたとかである。「彼が偉大な支配者になったとか、名誉、役職を得たとか、遺産が彼に舞い込んだ」とか、彼が騎士に、男爵に叙されるだろうとかである。あるいはある偽りの非難によって、しゃっくりをする人に対しておこなうように、愛を忘れさせるのである。聖ヒエロニムスは、〈『書簡集』〉第2巻第16書簡「修道士ルスティクス宛」において、エジプトの修道院で暮らしていた、あるギリシアの青年の例について語っている。「彼はいかなる労苦によっても、いかなる節制によっても、いかなる説得によっても愛から逸らされなかったが、ついに次の策略によって解放された。修道院長は自身の修道院の一人に命じて、彼と口論させ、あれやこれやの酷い中傷を浴びせ、仲間たちの間で彼を辱めさせ、そして皆に先立って彼を訴えに来させる。証人たちは訴追者のためにこぞって偽証した。青年は泣いた。そして、すべての者が彼に敵対したとき、修道院長が巧妙にも彼の肩をもって、彼が法外な悲嘆によって打ちのめされないようにした。だが、多くの言葉が必要であろうか。この創意によって、彼は治癒した。そして、最初の恋思いから解放された」。侮辱、中傷、軽蔑、汚名

——見くびられた美貌の侮辱

〈ウエルギリウス『アエネイス』1.27.〉

は男たちの恋情を逸らすためにきわめて強力な手段であり、ルキアノスが〈『娼婦の対話』〉第4巻〈正しくは3.3.〉で述べているように、「愛する者たちは侮辱されると愛さなくなるものよ」。愛する者たちは罵られ、あるいは無視され、軽蔑され、あるいは酷評されると、愛を憎悪に変える。「ぼくが戻るだって？ あなたがぼくに嘆願したって駄目だ」〔テレンティウス〈『宦官』49.〕〕。「ぼくはもう、あなたをけっして愛さないだろう」。「ぼくが彼女を〈愛するかって？〉、彼を〈迎え入れた〉彼女を、ぼくを〈閉め出した〉彼女を、〈ぼくを中に入れて〉くれなかった彼女を？」〈同書65.〉こうして、ゼピュロスがヒュアキントスを嫌ったのは、ヒュアキントスが彼を嘲って、彼のライヴァルのアポロンの方を好んだからである（〈偽〉パレパエトス『寓話物語集』〈「ヒュアキントスの物語」〉）。ゼピュロスはたとえ招待されたとしても、二度と来ることはないだろう。恋に落ちたかのように、いかに陰であざ笑われているのかを語るならば、彼は自分の相手を拒絶し、彼のことを好きでなくなる（これはアヴィケンナの助言である）。あるいはまた、彼の愛は偽りで、他の者に気があると、あるいは、彼女は愚か者、淫らな女王、あばずれ、意地悪な女、口やかましい女、悪魔と、あるいは、イタリア人たちが普通に経験しているように、彼あるいは彼女は忌まわしい汚れた疾病を、痛風、結石、排尿困難、てんかんをもって、それらの病は遺伝病で避けることができないとか、彼は肺病に罹り、梅毒をもっていると、また、彼は三つか四つの不治の皮疹や潰瘍に罹っていると、また、彼女は禿げており、彼女の息は悪臭を放ち、彼女は遺伝的に狂人で、それゆえ、親戚がみな同様に気狂いで、私はここでその名称を述べようと思わないが、女性に属している、多くの他の秘密の疾病をもっていると彼に語るならば。あるいは、彼は両刀遣い、宦官、不完全者、不能者、浪費家、賭博師、愚者、変人、乞食、女衞、借

金もちで、彼女を養うことができず、大酒飲みで、彼の母親は魔女で、父親は吊されたと、また、彼は胸の中に狼をひそませ、病んだ脚もち、レブラ患者で、何か不治の疾病に罹っていると、また、彼はきっと彼女を打擲するし、小便をこらえることができないと、また、彼は夜間に叫び、あるいは歩き回り、寢床を共にする人を刺し、寢言で自分の秘密をすべて語ると、そして、誰も彼のそばで寝ようとせず、彼の家はいくつもの霊によって取り憑かれ、そこでの恐ろしい、悲惨な物事は、男であれ女であり生きている者を遠ざけさせ、恐怖を覚えさせるのに十分であると。ド・ゴルドンは〈『医学の百合』〉第20章第2項で、このように助言している。「卑しい顔つきで、汚く不快な衣服をまとったある老女を準備させよう。そして彼女にエプロンの下に生理用ナプキンをもたせよう。そして彼女に次のように言わせよう。彼女の友人は酔っ払いだと、彼女はベッドを小便で濡らすと、彼女は癩癩もちで身持ちが悪いと、そして、彼女は身体には巨大な腫れ物があり、彼女は口臭があり、別の奇形もあり、それによって老女の身元が分かるのだと。もし彼がこのような言説によっても説得されないならば、彼女に突然、生理用ナプキンを取り出させ、彼の面前でそれを振り回して、これがあなたの愛するものよ、と叫ばせよう。そしてもし彼がこれでも諦めないならば、彼は人間ではなく、人間の皮をまとった悪魔である」。アヴィケンナは「愛の憂鬱症の治療について」〈『医学典範』〉第3巻第1部第4論考第24章で同じことを述べている。「老女に下品な事柄を語らせよ。それらから嫌悪が生じる。不快な事柄を語らせ、それを続けさせよ〔サヴォナローラ〈『主要な医術』〉第5規則〈正しくは第9規則〉〕。同じことをアルコラーニは『アル・ラージーの医学事典』第9巻第16章で述べている、等々」。

それに加えて、彼らが昔の恋人を悪しざまに言うように、より迅速に心変わりを巧みに起こさせるために、彼らに「新しい恋人を導きいれて」賞讃させるように、彼あるいは彼女が口説かれるように、あるいは、より美しく、より優れた性格で、より多くの財産、より良い出自、家柄をもち、はるかに好ましい他の誰かを口説くようにさせなければならない。

この者がおまえを嫌うならば、別のアレクシスが見つかるだろう。

[ウエルギリウス『牧歌』2.〈73.〉]

この方策によって、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ〈『頭脳の病』〉が望んでいるように、情愛の流れを別の方向へ変えることになる。

愛というものはすべて、続く新たな愛によって押しやられる〈現行版では「打ち負かされる」〉。

〈オウイディウス『愛の治療法』462.〉

あるいは、デ・バリユスが勧めているように、大河も多くの小川へと分かたれて最後にはゆっくりと流れるように、愛を分割させて消滅させることである〈おそらくはプラテンシスに拠る〉。

同時に二人の恋人をもつように、私は勧める。

[オウィディウス〈『愛の治療法』441.〉]

たしかに詩人〈オウィディウス〉が述べているように、あなたは同時に二人の恋人をもつように、あるいは一方の恋人から他方へと行くように強いられていると思うだろうが、それはすなわち、暖かい火の前から冷たい空気へと出る者が、次の部屋がより快適で、大いに気分を回復させるとしても、そこから離れることを嫌うのと同様であり、女性の相違とこの火の相違とは同じものである。あるいは、彼を公の見世物や芝居や集会に連れていくとして、そこで彼はさまざまなものを見るであろうが、おそらく彼は最初の選択を嫌うことになるだろう。彼を次の町に、おそらく次の家に連れていっても同様だろう。そして、パリスがヘレネを見たためにオイノネへの愛を失い、クリセイデがディオメデスと会話を交わしたためにトロイラスのもとを去ったように〈チョーサ『トロイラスとクリセイデ』第5巻〉、彼は以前の恋人たちを嫌うことになるだろう。そして、テセウスが、彼の最初の愛する恋人であったアリアドネを、ディア島〈ナクソス〉に、深く眠ったままにして置き去りにし、彼女を運命にまかせたように、彼女を自分の背後に残して立ち去るだろう〔ヒュギヌス『神話伝説集』43.〕。彼〈ペトロニウス〉が述べるところでは、「このとき初めて、私はドリスへの古い愛を軽蔑した」〔『サテュリコン』126.〕。ドリスはこの方に比べれば、たんなるみすぼらしい女にすぎない。鏡で自分自身を見る者が、すぐに自らの姿形を忘れてしまうように、愛という追従の鏡は、取り除かれると曇るであろう、そして、少しの間不在であれば取り去られるであろう。その次の美しい対象がおそらくそれを変えるであろう。ルキアノス〔『舞踊について』〈4.〉〕において、ある青年が哀れにも愛に陥っていたが、たまたま劇場にやって来ると、そこで他の美しい対象を見ることによって「心の正常さを取り戻し」、完全に回復した。「そして、あたかも忘れ薬を得たかのように、陽気に家へ戻った」。ある鼠は（ある寓話作家が述べるには）、箱の中で育てられ、そこでパンとチーズの欠片で養われ、これら以上に美味しい食物はないと思っていたが、ついに外に出て、他の多種多様な食物をふんだんに食べるようになると、それまでの生活を忌み嫌った。この寓話を汝自身の教訓としなさい。プラトンは『法律』〈正しくは『国家』〉第7巻〈514-16.〉において、地下の都市についての見事な作り話を述べている。その都市には小さな穴を通して、少量の光が上からやって来ており、住民たちはそこより良い土地は存在しないと思っていた。そして彼らが初めて外に出たときには、その光に耐えることができなかったのだろう。「かろうじて太陽を見た」。しかし、彼らが光に少し慣れたのちは、「地下で暮らしている仲間たちの不幸を嘆いた」。愛する愚か者はこのような状態にあり、最初に見た恋人ほど美しい人はなく、彼女以外には誰も好きになることはない。しかし、しばらくのちに、彼女を他の女性たちと比べたならば、恋人の名を呼ぶことも、見ることも、思いだすことも忌み嫌う。これは一般的な真実である。というのは、彼〈タティオス〉が述べているように、「新たな火は前の炎を追い出します。そして、現に居る者たちを愛するというのが、多くの人びとの本性なのです」〔『クレイトンとレウキッペの恋の話』第6巻〈17.〉〕。そして多くの者たちと

同様に（彼が告白しているように）、フロリアトを見るまではアミエを愛していたが、キュンティアを見ると、二人とも忘れた。しかし、美しいフィリスは彼女たちすべてをはるかに凌いでいたが、クロリスはフィリスを超えていた。さらにアマリュリスに出会うと、彼女が彼の唯一の恋人となった。（ポレミウス〈正しくはポリアエヌス〉[アリストエネトス『恋愛書簡集』〈1.〉4.]が述べるには）おお、神のごときアマリュリスよ。「おまえは、糸杉の姿にも似て、何と細身で、何と優雅で、何と上品なのだろうか」。次にまた別の女性を見るまでは、彼女が彼の想いの唯一の対象となった。結局、彼のもっとも愛するのは、彼が最後に見た女性だった。海神のトリトンは、彼がミラエネの前に行くまでは、最初レウコテアを愛していた。ミラエネは、彼がガラテアを見るまで、彼の心を支配していた。しかし（彼女が嘆くように）彼はすぐに別の女を、また別の女を、さらにまた別の女を愛した[カルカニーニ『対話』]。これはヒエロニムスが伝えていることだが、いつも為されてきたことである。「異教の哲学者たちは、釘が別の釘を、ピンが別のピンを押し出すように、ある愛を別の愛によって押し出す。それを7人のペルシアの君主がアシュエルス〈クセルクセス〉に対して、彼の王妃ワシュティの欲望を他の女性への愛で代替しようとしておこなったことである[『書簡集』第2巻16.〈125. 14.〉]。パウサニアスが「エリス地方」において述べているには、一人のクピドが別のクピドと争い、このクピドが一方のクピドを負かしたがゆえに、このクピドから花冠を受けとっている場面が描かれていた。

一方への愛が他方への力を奪う。

[オウィディウス〈『恋の治療法』444.〕]

そしてトゥリウス〈・キケロ〉は『神々の本性について』第3巻〈23. 60.〉において、ガイウス・コッタと議論しながら、それぞれが務めにおいて異なる、三種類のクピドに言及している。フェリクス・プラタは、彼の『症例』第1巻において、自分の患者であるバーゼルの男やもめを、策略だけによって治したことを自慢している。この患者は、彼に仕えているみすぼらしい女中を溺愛し、友人たちや子どもたちの説得も彼の心を遠ざけることができなかったのだが、その町に住む別の誠実な男の娘に出会うようにすると、彼は彼女を愛し、いっしょに暮らし、そのあとは、最初の女性の名前を呼ぶことも見ることも忌み嫌うようになった。ルクレティアの死後、「エウリアルスはいかなる慰めも受けつけなかったが、皇帝シギスムントが彼を自分の宮廷の高貴な女性と結婚させると、たちまちのうちに、彼は解放された」[ピッコローミニ〈『書簡集』114〕「エウリアルスからルクレティア宛ての書簡」]。

### 第5節 第3項

#### 助言と説諭。男性の、女性の、事実の醜悪さ、 結婚の、欲情の行為の罪、悲惨。

英雄的愛ともいう燃える欲情の原因にはさまざまあるごとく、それを鎮め助ける治療法にも多くの良いものがある。そのなかでも、まず第一に扱うべきであった、助言と説諭は非常に重要で、外してはならない。多くの人が、盲目的で頑なな情念には助言など無益だと考えている。

内に分別も限度もないものを、  
分別によって抑えることはできません。

[テレンシウス〈『宦官』57-58.〉]

愛には一体いかなる限度があるのか。

[ウエルギリウス『牧歌』2.〈68.〉]

しかし、疑義なく、良き助言や忠告には大きな力があるはずである。とくに賢明で父親的、敬虔で思慮深い人物、その集団の人たちが尊敬し、畏怖する権力者、あるいは明敏な友からのものであれば、なおのことである。またそれ自体、気を逸らすことができ、また十分である。医者ド・ゴルドンは、助言や忠告に大いに意味を見だし、「恐れている人からの助言で、この世の危険、地獄の審判、天国の歓喜を示して見せ、彼女から離されるがよかろう」〈『医学の百合』〉と、何が何でもまず最初に用いられるべきものとした。彼らが情念の激烈さのあまり少し消耗したり、情念が収まって和らいだりしたのち、説得して思いとどまらせる誰か思慮深い人が、ド・ゴルドンの用意していたものであった。初期では、助言を与えるには時期尚早で、それは、子どもが死んでしまったばかりのときに両親を慰めても何にもならない、というのと同じことである。鎮痛剤、強心剤、神酒のごとき飲み物、水薬、ホメロスのネベンテス（忘れ薬）すなわちヘレナの一杯などを処方しても甲斐なく、彼女は胸を動悸させるのをやめることなく、嘆き、時が来るのを求めて悲しみの声をあげ続けた。しばらく情念に任せておけば、必ずや訪れるに違いない惨めな出来事や危険、地獄の苦しみ、天国の喜び、そして同様に彼らが誤った道をたどることによって失う、また出会う事柄を予見して前に進んでいくことができる。これは適当な方法で、非常に良い手段である。というのもセネカが[『幸福な生について』第14章〈正しくは『自然問題集』3.30.8.〉]で]悪徳について言ったことを、私は愛について言おう、「師なくとも学べるが、師なくしては離れることは難しい」。それゆえ、説諭し、たいいてい生じる愚かしいことや不都合、不完全さや不満足を教える、誰か監督のような人がいることが好ましい。それは本人の盲目、激情、狂気では知ることのできないものであり、弱さゆえに理解できないものなのであるから。しかも、彼らに自分を見つめ、はっきりと知り、親身な勧告に耳を傾けさせるのは、彼らにとって良いこ



とである。ルキアノスでの、愛の病に陥ったカルミデスにトリュバイナが、「あなたを悩ませているのは何なの、私に言ってごらん。おそらく私はあなたの心を楽にし、あなたの願いが叶うようにしてあげられるわ」[『娼婦の対話』〈11. 1.』]と言う。間違いなく彼女にはそれができようし、あなたにも同じことができるだろう。恋患いの患者が良い助言を得られ、少なくとも言ってもらったことに耳を傾けるなら、の話だが。

もし、その男が、とにもかくにも愛しているというのなら、相手の彼女は誠実な女性か娼婦かのどちらかだろう。もし、不誠実な女なら、彼には、かのソロモンの『箴言』第5章、『伝道の書』〈第7章〉第26節、アンブロシウス『カインとアベル』第1巻第4章、ユダヤ人フィロン『聖具室では受け取るべきではない娼婦の報酬について』、プラティナ『愛についての対話——マントヴァ人ルドヴィコ・ステッラへ』、デスパンスや、ピエトロ・カプレット『愛の蔑視』、エネア・シルヴィオ・ピッコローミニの辛辣な〈第16〉書簡を読ませるか、それらについて説き聞かせよう。ピッコローミニは、「許されざる愛の治療」と自ら称したその手紙を友人ウォーバーグのニコラスに宛てていた。曰く、「若者の助長、男たちの破滅、崩壊、家督の壊滅、名誉の失墜、悪魔への飼葉、死への扉、地獄の代替以外に、娼婦が何の役に立つのか」。「かくのごとき愛は魂への罠」[〈ジョルダン〉『愚者の観想』〈第1巻〉第34章]、苦い蜜、甘い毒、優雅な破壊、自然発生の害悪、泥と糞の混合物なのだ。ピエトロ・アレティーノの有名な女王ルクレティアは「大食、憤怒、嫉妬、傲慢、瀆聖、窃盗、殺人は、すべて娼婦が商売を始めた時に産まれた」と認めている。というのも、続けて彼女が言っているように、「娼婦は野卑な金持ちより誇り高く、梅毒より嫉妬深く、地獄のように悪意あり、憂鬱で、強欲だ」からである。「もし邪悪な、さらに邪悪な、この上もなく邪悪な女が、世界の始まりからいたとすれば、それは娼婦だよ。どれだけの娼婦を私は懲らしめ、痛めつけ、殺し去ったことか。ああ、アントニアよ、おまえは私の外観しか見ていない。でも神様は私の内面をご存知さ、邪悪の水溜、罪の汚水溜め、梅毒だらけの女王としての私をね」[『ナンナとアントニアの対話』〈バルト訳〉『ポルノディダスカルス』]。すっかり愛に溺れてしまった男には思い致していただく。サムソンやヘラクレス、ホロフェルネスなど他者の限りなき過ちとその顛末に眼をやっていたいただきたいのだ。もし、愛する女性が他の男の妻ならば、神の眼にも人の眼にも忌まわしきこと、姦通は明らかに神の命で禁じられた致命的な罪で、魂を危険にさらす。神を畏れる者なら、あるいは敬虔な気持ちをもっている者なら、それは憤み、自分自身の事態の忌まわしさに嫌悪感を抱く。もし、誠実な乙女を愛しているなら、辱めることになるか、結婚するかである。辱めるなら、それは私通であり、(軽く考える人もいるが)怪しからぬことであり、ほとんど姦通にも等しい。もし結婚するなら、彼が何を手にすることになるのか、真剣に考える、すなわち諺にあるように、跳ぶ前に見るべきであり、感情を抑えて、まず自分と相手の暮らし向きの家族と状況を吟味し、財産、年齢、家柄その他の条件の面でつりあった結婚なのかどうか、彼女が彼の愛する相手足りうるのかどうかを調べるべきである。そんな風に進むかどうか。もし進まなければ、その男には、賢明にも最初に駄目と思えばせ、過度の情熱を抑え、欲望を鎮め何か他のことを考えて思考を逸らせよう。それでもうまくいかなかったら、アエネア

スが夢で見たメルクリウスに予見で注意されて、デイドの愛を避け、大急ぎで海に出ていったように

彼はムネステウスと、セルゲストゥス、それに勇敢なクロアントゥス呼び、  
密かに艦隊を準備することを命じる――

[ウエルギリウス〈『アエネイス』4.288-89.〉]

彼女は誓い、涙し、祈り、呪って反論したが、

――彼は、涙にも心動かされず、  
その言葉を聞くも何も変わらぬ。

〈同書 4.438-39.〉

あなたのメルクリウスには、あらゆる魅惑、上辺だけの快樂、内への、あるいは外への心地よい刺激に逆らう法則をあなたに説いてもらおう。もし、そうしようと思えば、そうすることもあるが、父親が娘への、兄が妹への愛に溺れることはない、それはなぜか、それは自然に反し、法に背き、当を得ていない。もし、彼が病気がちで弱かったり、奇形をもっていたりするなら、自分の姿の醜さ、身体的欠陥、虚弱さに考えを致していただく。もし、何らかの危険性を孕んでいるなら、それを避けるよう努めていただく。もし、訴訟か何かの問題に巻き込まれているなら、恋愛問題を切り離して、その訴訟に専念し、何であれ自分の為すべきことで努力すれば、うまくいくだろう。しかし、悩みから逃れられなければ、自分と相手の暮らし向きについて、前もって賢明に熟考すべきである。もし、年齢差があり、女性が若くて彼が年老いているなら、なんと不釣り合いな縁組になるのが必定であろうか。ルキアノスでのリュキヌスがティモラウスに言うように、老いて禿で鼻の曲がった野郎が若い娘と結婚するなんて、不均衡な頸木で、なんと馬鹿げた慎みのないことであるか。好色老人を見るのはなんと唾棄すべきことか。禿が櫛で、盲人が眼鏡で、聾啞の老いぼれがパイプで、君が妻で、何をしようというのか。わずかばかりの得のために、若い男が年老いた女と結婚するのもなんと馬鹿げたことなのか。しかし、相手が年齢も家柄も、財産も、その他の点でも等しく釣り合った女性であれば、男が結婚を望んだとしても、それは立派な状況で、ただ尊重されてしかるべきである。おそらく彼女の美しさ、そして容姿の端正さ、それが通常主たる目的であるが、彼女は、少なくとも彼の眼には、ウェヌスが美を与え、カリタスたちが優雅を分け与えたもっとも完全な姿形なのである。だが、他の男たちも同じように確信するだろうか。それとも彼の判断の過ちなのか。

眼と定まらぬ感覚がわれらを欺き、  
理性が圧迫されて、われらを偽る。

## [ペトロニウス『サテュリコン』]

もっとよく吟味したら、あるいは少し不在であれば、彼女も思うほどには美しくないということが、あなた自身にも起こる。女性たちが現われても、誰もいない。彼女と一緒にいる女性と比較してみるがいい、試してみるべき試金石である。手と手を較べ、身体と身体を、顔と顔を、眼と眼を、鼻と鼻を、首と首を較べ、それからあらゆる部分のそれぞれを、それから全体を、あらゆる姿勢で、異なる場所で較べて、あなたがどれくらい彼女を好きか私に知らせていただきたい。それほど美しいのは、彼女ではなく彼女の上衣であるのかもしれない。彼女の衣服を別の女性に着せてみれば、その女性はすっかり同じく美しくなるだろう。かつて詩人 [オウィディウス] が〈『愛の治療法』341-48.で〉描いているように、彼女を衣服から切り離してみよ。卑しい乞食の身なりの、あるいは流行遅れのごわごわの羊毛や安っぽい麻、煤や汚れにまみれていたり、オポポナックス、サガペナム、アッサポエティダその他の粗悪なゴムの臭いがしたり、なんらかの不品行で汚れていたりする服装の彼女を見るとせよ。あるいはまた医者 of プラッサヴォーラが、処方したキンポウゲに関して、患者のマラタスタの様子に気づいたように、「手を大地に置き、尻の穴を天に向けて突き上げ、(まるで幾何学図形を地面に描いているのに、トリュフを集めていると思われたソクラテスの徒、かのアリストパネスのように見られるだろう) 白い壁に黒胆汁を振りまき、その結果部屋すべてを、また自分自身を台無しにする」〔『治療法』第2巻「カタルシス」〕。すべてに光を当てれば、悪くとも、あなたが彼女を眼にしたとき、あなたが今愛しているように彼女を愛するだろうか。あなたが彼女を凍える朝に、寒い天候に、なんらかの熱情、心の動揺のうち、泣き、ひりひり痛みを感じたりして、見るからに萎え、醜くなっているのを見たでしょう [トマス・モア『エピグラム集』〈「美について」2-3.『夜業』所収〕。彼女は多くの場合、落ち着いた表情をしているときはかくも可愛く美しいが、いったん笑ったり微笑んだりすれば、燕のような口の醜い顔になり、嫌悪感を催させる、不揃いの、腐ったような、汚い歯を見せる。素敵な上衣の下で、皮膚は黒くて、脚は痛風病み、醜い背中の曲がった屍。高価な衣装にもかかわらず、禿ていたり、闇夜や蠟燭のもととか、〈偽〉ルキアノス [の『恋する者たち』第4巻] で眼に留められたカリクラティデスのように遠くからでは美しくとも「近くで見たり、朝見たりすれば、獣より醜いことがある」。「もし、あなたが、口や鼻、その他の身体の通路を通じて出てくるものを、注意深く考えたなら、糞ほどのつまらないものを眼にしたことはなかった」[サン・ヴィクトルのフゴ『魂の回廊』第1巻第1章〈正しくは聖ベルナル『瞑想』〕。私の助言に従い、上着を脱いだ彼女を見なさい、できればまったく衣服を纏わぬ彼女を、「盗み取った色を纏わぬ」(ホラティウス『書簡詩集』1. 3. 20.) 彼女を見なさい、イソップのカケスカ、プリニウスのカンタリデスのように [『博物誌』第11巻第35章〈正しくは29. 30. 93-96.〕、醜悪で愚かしくて、眼にするのも耐えられないことがわかるだろう。あるいは彼女が病気で蒼白で衰弱して、骨と皮ばかりになって死の床についているところや、もう死んでしまったところを見たとしてみなさい。ベルナルが言うように「彼女の抱擁は喜ばしかったのに、様相も恐ろし気にな

るだろう」〈『瞑想』第3章〉。

いつも芳しき息を放っていた彼女が、芳しき呼気ではなく臭気を放つ。

[ブキャナン『十一音節詩集』]

一日の間は、花のように、芳しく、とても生き生きとして美しいが、次の日には干からび萎れ、臭気を放つ。かのホメロスに褒め讃えられた美しいニレウスも、ひとたび死んでしまえばテルシテスより醜く、ソロモンはマルコルプス同様醜く死んだ。あなたの愛する人はかつては

彼女はその美しい眼によって、いっそう美しく思われた。

[ブキャナン『十一音節詩集』4.32.]

だが、病にかかったり、死んだりしたら、

何の価値もない泥にも劣ると思われる。

[ブキャナン『十一音節詩集』6.34.]

今や彼女の姿が醜悪となつては、彼女の抱擁は好ましくなく、ヘレネの死骸を見るならゴルゴンの顔を見ていた方がましである。

女性の裸体を見るのは、それ自体彼の熱情を冷ますのに効果ありという意見の人たちもいて、フランス人のモンテーニュが『エッセー』〔〈2.12.〉「レーモン・スボンのための弁明」〕で述べているように、愛戯に長けた者たちが好色な情念の療法としてあげていることは、一考の価値がある。そのことは詩人も示唆している。

開けっぴろげの身体の見たくもない部分を

見てしまったために、人生を駆け抜けていた愛も立ち止まる。

[オウィディウス『愛の治療法』〈429-30.〉]

奥方スタラトニケがたまたま衣服を脱いでいたとき、禿げた頭頂を見てしまったために、それ以来彼女に欲情できなかつた、シリア王セレウコスの話がある。医者レムンドゥス・ルリウスは、とても深く愛していた恋人の胸に潰瘍か潰爛を見つけたために、次の日から彼女を見るのを嫌悪した。フランス王フィリップはデンマーク王の娘と結婚したが、「一晩妻として使用したあとで、彼女の息が臭かったからとも言われ、あるいはその他の理由からか、彼女を父親のところに送り返した」と、ニューバラのウィリアムが〈『イングランドの事績』〉第4巻第24章で語っている。ピエール・マシユは『ルイ十一世伝』で、われらがイングランドの歴史〈ブキャナン『スコッ

トランド史』)でのあら捜しもしている。というのも、スコットランド王の娘マーガレットとフランス王ルイ11世の妻が、いかに息の臭さゆえに夫によって拒否されたか語っているからである。そのような多くの結婚が名声や見た目の美貌ゆえに為され、新婚旅行が終わったあとで、悲痛に変わる。燃える欲情はひと時の閃光、火薬の情念で、往々にして憎悪や嫌悪、侮蔑が最高潮級で後に続くものだからである。

——皮膚ががさがさでたるみ、  
歯が黒くなると——

[ユウエナリス 〈『諷刺詩集』6. 144-45.〉]

彼女らが老いて、人目を惹かなくなると、男たちはもはや我慢しないのが普通であろう。

——もうわれわれはお前にはうんざりしているのだ。

〈ユウエナリス『諷刺詩集』6. 147.〉

消え去れ。彼女らは年老いて、不快で、忌まわしい、嫌な者となり、お前は不潔な汚らわしいあばずれ女だ。

——ポイボスよ、お前は脱糞している者の顔つきだ。

[マルティアリス 〈『エピグラム集』3. 89. 2.〉]

お前はサトゥルヌスの尻だ、萎れて乾き、味気なく古びている。

——なぜなら、お前を皺が、そして白髪が醜くしているからだ。

[ホラティウス『オード集』第4巻第13番〈11-12.〉]

(私は言う) 消え去れ、「門扉は開いている、立ち去れ」[キケロ『カテリーナ弾劾』〈1. 10.〉]。

しかし、それどころかあなたは、自分の想い人が完璧であり、すべての男性が心で思うところでは、完全さに極まる美の持ち主で、彼女については異論がありえない、と仄めかすだろう。彼女の容姿には何も付け加えることも、何も減ずることもできないだろう。彼女はその美、顔立ちの良さ、心地よい優美さのゆえに女性の鏡であり、模倣することはできず、「純粋な喜び、純粋な魅力」〈カトゥルス『詩集』32. 2.〉であり、彼女は「ウエヌスの香油箱、三美神の小箱」、自然の完全さの倉庫に他ならず、ウエヌスと三美神が持っているものをすべて所有している、

——千の松明と千の形象を、

その各々の部分は完全で完璧で、

頬は楽しそうで、薔薇色の口は楽しそうで、動く眼は楽しそうだ。

[ジョン・リーチ 〈『優れたムーサ』 2.75. 「フォルミナ」〉]

彼女は容姿ゆえに讃嘆されるべき、まったく比較することも対抗することもできない者で、「ある神の像に似せて創られた黄金の子ども」、不死鳥、「開花する、優しい小ウェヌス」、ニンフ、妖精、乙女だったころのウェヌス自身のごとき者で、「比類のない者」、純粹な第五精髓、「花々とマヨラムの匂いを放つ者、女性の奇跡」である。彼女がそうだと仮定して、それがどれほどの間続くのだろうか。

一日一日が美の花を刈り取る。

[セネカ 〈『オクタウィア』 550.〉]

毎日、彼女の容姿は減じられ、この美は「儂い利得」、一瞬の燦めき、たちまち壊れるヴェネツィア・ガラスである。

美しい形姿は人間たちへの不確かな利得、

——短い時間のわずかな贈り物、

[セネカ 『ヒッポリュトス（パエドラ）』 〈761-62.〉]

それは長続きしないだろう。われわれがアネモネと呼んでいる、アドニス美しい花は、ひと月しか花開くことはなく、すべてを統べるこの優雅な美は一瞬にして消え去る [カメラリウス（子）〈『象徴とエンブレム集』〉第1巻第68エンブレム]。それはすぐに失われる宝石、画家の描く女神、「偽りの真実」、たんなる絵画である。「麗しきは偽り、美しさは空しい」（『箴言』 31. 30.）。

脆い小さな宝石、束の間の泡は、青白い美、

雪、薔薇、露、風、煙、そして微風、無。

[ヴァン・パウヒュイセン 『エピグラム集』 第4巻 〈実際は第1巻 4. 15-16.〉]

格言のとおり、もし彼女が美しければ一般には愚かであり、もし誇り高ければ軽蔑すべきで、「美には高慢が伴い」〈オウィディウス 『歳暦』 1. 419.〉、あるいは不誠実もそうであり、「美と純潔が協和することは稀であり」〈ユウェナリス 『諷刺詩集』 10. 297-98.〉、彼女は、美しく、かつ誠

実でありうるだろうか。アゲシクレスの息子アリストンは、スパルタの少女で、ギリシア中でヘレネの次に美しい女性と結婚したが、彼女の身体の欠陥のゆえに、彼女は世界でもっとも忌み嫌うべき、獣じみた被造物だった [パウサニアス〈『ギリシア案内記』〉第3巻「ラコン」〈7. 7.〉]。それゆえ、私はあなたに対して、セネカとともに彼女の容姿ではなく、特質を尊重するように勧めたい。「あなたは、金で塗装され、金糸と宝石の縫い取りを施された鞆をもつ剣が良い剣であると言うだろうか。そうではない。良い剣とは、鍛えられた鋼でできた、耐えることのできる、鋭い刃と刃先をもつものである」 [『書簡集』76.]。この美とは身体だけに属しているもので、実際には、ナジアンゾスのグレゴリウスがわれわれに語っているように [『弁論』3. 〈正しくは31.〉]、「時の嘲笑と病気」、あるいはボエティウスが語っているように〈『哲学の慰め』3. pros.8. 21-22, 26-28.〉、「それは花のように移ろいやすく、われわれをそのようにさせているのは自然ではなく、大部分は眺めている者の欠陥なのである」。というのも、他の者に尋ねてみれば、その者にこのような事柄は見えないだろう。「お願いだから、私に、私の恋人がおまえにどのように見えるのかを教えてください」と、アリスタエネトス [『恋愛書簡集』〈1.〉11.] の中で彼女は妹に尋ねている。「私がいへん崇めている方を、私はもっとも優しい紳士だと、私がこれまで会ったもっとも礼儀正しい男性だと思っていますが、私は告白しますが（そうするのは恥ずかしくありません）、私は恋に陥っているので、それゆえ適切な判断ができないのです」。彼女が正しく思っているように、彼女は自らの判断を疑っているし、そしてあなたも恐らく疑っているだろう。しかし、アナクレオンのパティルスのように〈『詩集』17.〉、彼女が実際に美しく、金髪であるでしょう。そして（個々の箇所を吟味するならば）彼女がもっているのは、

燃えあがる眼と、乳白色のうなじ、

[フランス・ルカス]

とても血色のよい顔色、小さな口、珊瑚の唇、純白の歯、柔らかくぽっちゃりした首、身体、手、足、すべてが美しく、眺めるのに楽しく、あらゆる優美さと優雅から成っており、完璧な一体。

メリタの瞳はユノのごとく、手はミネルウアのごとく、

胸はウェヌスのごとく、ふくらはぎは海の女神のごとくせよ。

[同]

彼女の頭はプラハから、胸はオーストリアから、腹はフランスから、背中はブラバントから、手はイングランドから、足はラインから、尻はスイスからもたらすとせよ [ベベル『ドイツの格言』〈151.〉]。そして彼女にはスペインの身振りを、ヴェネツィアの装いを、イタリアの世辞と才能をもたせよ。

輝く眼を星辰のような炎によって燃えあがらせ、  
首を薔薇のように花開かせ、髪を黄金よりも燦めかせ、  
蜂蜜のような唇を輝く赤で染め、  
光り輝かせよ、そして、神々しい身体によってウェヌスを凌ぎ、  
美によってあらゆる女神を凌がせよ……

[ペトロニウス『サテュリコン』]

彼女を、ルキアノスが『絵画論』で描写しているような、エウファラノルがかつてウェヌスを描いたような〈プリニウス『博物誌』35. 40. 128-29.〉、アリストエネトスがライスについて述べているような一人の完全な者にせよ、もう一人のヘレネ、カリクレア、レウキッポス、ルクレティア、パンテア、パンドラにせよ。彼女に、ファオンがウェヌスを背負って浅瀬を渡ったときに、ウェヌスが彼に与えたような、彼女自身をいっそう引き立てるための美の箱をもたせよ。彼女に、技芸と自然が賦与することのできるあらゆる助力を使わせよ。彼女をいかなる者にも、あなたが望むような者に、あるいは一人で彼女たちすべてである者にさせよ。軽い病氣、熱、天然痘、傷病、傷痕や四肢の損失、激しい情念、発熱や低熱が、すべてを一瞬のうちに損ない、すべてを傷つける。出産、老年、暴君の時がウェヌスをエリュニスに変えてしまい、荒れ狂うと、心配が、突然彼女に皺をもたらす。彼女が結婚して少したつと、黒い雄牛が彼女のつま先を踏む。彼女はひどく変わり、優美さも失われて、あなたは彼女だと気づかないだろう。ある者は太り過ぎに、ある者は痩せ過ぎになる、等々。上品なマティルダ、可愛い陽気なペグ、甘く歌うスーザン、氣どった愉快なモル、優美に踊るドール、こぎれいなナンシー、上機嫌なジョウン、敏感なネル、接吻するケイト、黒い瞳の澁刺としたベス、きれいな白い腕の美しいフィリス、笛吹きフランク、背の高いティブ、痩せたスイブ、などはすぐに自らの優美さを失い、不愉快で、古くさく、哀しげで、鈍重で、気難しくなり、そしてついには、見棄てられる。「今や、生き生きとした表情、優しい甘言、勝ち誇った哄笑などはどこにあるのか」。かつての美しく輝く眼は濁って見え、彼女の柔らかな珊瑚の唇は蒼ざめ、乾き、冷たくなり、ひび割れ、膨れるだろう。彼女の肌は荒れ、あの柔らかで優しい肌は硬くざらつき、彼女の肌の色は一瞬にして変わるだろう。そして、マティルダがジョン王に書いたように、

今の私は、あなたが最後に見た私ではありません。  
あの優美さはすぐに消え去り、過去のものとなりました。  
百合の谷に抱かれていた薔薇の色合いは  
今は皮膚病がはびこり、蒼ざめています。

[ドレイトン]

他の者たちにおいてもこのとおりである。彼女たちの美は、冬の樹木のように消え去る。そのこ



とを、詩人〔セネカ〕において、デアニラは優雅に表現している。

あなたは幹だけの不格好な森を見いだすでしょうか。  
まさにそのように、私の形姿は、長い道のりを歩いて  
いつも何かを失い、そして輝きは衰え、  
そして、われわれの中にあつたものはいっそう衰えています。  
かつて求められたものは消え去りました。そして、出産にいそしみ、  
母としての務めが私から、その多くのものを運び去りました。  
老年がすばやい歩みで奪い取ったのです。

〔セネカ『オエタ山上のヘルクレス』第2幕〈384-91.〉〕

クリュストモス〈『女性と美についての演説』〉とともに結論して、「あなたが、人目を惹く美しい人を、華麗なボナロバを、美しいドンナを、唾をわき立たせる女性を、魅惑的な少女を、あなたが容易く恋に陥る女性を、顔立ちがよく、輝く瞳をもち、陽気な表情で、輝く光彩を放つ顔立ちの、好ましい優美さをもち、あなたの魂を捻りつぶし、あなたの欲望を掻きたてる女性を見るとき、あなたは自分の中で、あなたが愛しているのは土にすぎないことを、あなたをかくも悩まし、かくも崇めさせているものがたんなる糞便であることを考えるならば、あなたの猛り狂う魂は落ちつくだろう。あらゆる嫌悪すべきものを、美が彼女の顔から皮膚を取り去るならば、その下にあらゆる嫌悪すべきものを見るだろう。表面だけの皮膚、骨、神経、腱であることを見るだろう。彼女が病気で、皺が寄り、髪に霜が降り、頬はこけて、老いるのを想像しなさい。彼女の内部は汚れた粘液、悪臭を放ち、腐敗した排泄物で満ちている。彼女の鼻孔には鼻水と鼻汁が、彼女には口には唾液が、彼女の眼には分泌物が、彼女の頭には下品なものがある、等々」。あるいは、彼女がもっとも美しいときを選んで、陽光の下で彼女を身近に見て、彼女の傍により近く、さらに近く立つならば、あなたは多くのものをほとんど見てとり、愛は減じるだろう。それはカルダーノが巧みに書いているように「彼らのはっきりと見るほどに彼らの愛は減じる」〔『精妙さについて』13.〕——スカリジェ（父）はそれについて彼を嘲ってはいるが〈『顯教的演習』301. 2.〉。もし彼が彼女を間近に見て、すなわち、彼が誰であろうと、アルプレヒト・デューラー、ロマッツォ、テニエのもののような対称性と比例性の規則にしたがって、こうした姿勢を正確に見るならば、彼に彼女のことをどう考えるか問いただしなさい。もし彼が「美の目利き」〈テレンティウス『宦官』566.〉ならば、人相において多くの欠陥を、誤った色彩を、誤った形態を、片側の方がより大きそうな顔を、鉤鼻を、やぶにらみを、浮き出た血管を、眼の隈を、皺を、にきびを、赤斑を、染みを、剛毛を、いぼを、あざを、凹凸を、ざらつきを、皮癬を、蒼白さを、黄ばみを、そして、七面鳥の首にあるような多くの色を、そして他の部分に多くの不都合なものを、「あなたが不足を感じるものを、あなたが取り除きたいものを」、一人目に斜視を、二人目にしかめ面を、三人目にあくび面を、寄り目などを見いだすだろう。彼が述べていることは真実である。すなわち、

私がしばしば述べたように、「仔細に観察する者には、欠陥がないような完全なものは稀である」[カルダーノ『精妙さについて』第13巻]。この欠陥や不釣り合いが見いだされるのは顔だけではなく、身体と魂のすべての部分においてである。彼女はたしかに美しいが、愚かである。彼女は可愛く、魅力的で、上品で、威厳のある姿をしているが、おそらく傲慢で、不誠実で、厳しく、不公平で、我が儘である。彼女は金持ちだが、醜い。彼女は優しい顔をしているが、身持ちが悪く、教育がなく、下品で淫らな蓮っ葉女である。彼女はきれいな身体つきだが、他の点では不潔なあばずれで、邪悪なたちの娼婦である。庭の花々のあるものは色彩があるが芳香はなく、別のあるものは香しい匂いだが、眼には見苦しい。あるものは、ヘンルーダのように味はよくなく、よもぎのように苦いが、それは医学的にはもっとも心臓に効く花であり、胃にもっとも好ましい。男性と女性も同様であり、ある者はきわめて有能であるが釣り合いがとれず、貧素で卑劣である。彼女の眼は良いが、手と脚は悪く、脚は立派だが、歯は悪く、肥満である、等々。身体と精神のあらゆる部分を吟味しなさい。私はあなたに、すべてについて調査するように勧める。彼女が怒り、陽気で、笑い、泣き、熱く、冷たく、病気で、不機嫌で、着衣で、脱衣でいるところを、あらゆる服装、立場、身振り、情念において見なさい。彼女の食事を食べてみなさい、等々。そうすれば、これらの内のあるものによって、あなたは確実に彼女を嫌いになるだろう。彼には、彼女だけを観察するのではなく、彼女の両親がいかに振る舞うのかを観察させなさい。というのは、このような年齢に至ると彼らの内に宿る、身体や精神の歪み、欠陥、妨害を、彼女らもおそらく引き継いで、同様に苦しめられており、「父親に似る」あるいは「母親をまねる」だろうだからである。それに加えて、彼には彼女の仲間たちについて、(ゲバラが述べているように)「彼女が会食において、いかなる人たちを話しているか」を知らしめなさい。

その人自身から分からない人も、その仲間から分かる。

〈ヴァルタ『格言集』18820〉

トゥキユディデスによれば、他所では話題にもならない女性が一番である〈『美しいペロポネソス人について』〉。というのも、もし彼女が道楽者、遊び人、歌い手、ふざけ者、あるいは踊り子として知られているなら、彼女には注意を払うべし。テオクリトスは何と言っているか。

だが、あなた方祝祭の乙女たちよ、ゆめゆめ急ぐなかれ、  
ほら、雄山羊があなたたちと踊ろうと待ち構えているぞ。

〈『牧歌』1. 151-52〉

ファウヌスやサテュロス、そういった好色なバックスやエレノーラがいれば、必ずや悪戯行為に走る。何らかのそういった不徳、猥褻、紊乱、醜悪、悪状態、などを彼らが感じ取れば、じつとそれについて沈黙思考させるがよい、そうすれば、カプレットが『『愛の蔑視』で] オウィディ

ウス〈の『愛の治療法』417-18.〉から引いて忠告するように、彼女の欠陥に気づき、悪徳や過ちにも気づき、不完全さを思い、孔雀の足や汚れた鶏冠がその美しい羽根や自慢の尾羽を忘れさせると俗に言うように、それが、愛の狂える後先考えぬ激情を逸らせ抑える次善の策である。彼女は愛らしく、美しく、器量がよく、能力もあって、礼儀正しく、親切。しかし、「もし彼女が私に対してそうではなかったら、彼女が親切だなんてどうでもいい」〈ウィザ『麗しき美德』「ソネット4」15-16.〉。ピロストラトスの「他の男には美しいが、私には尊大」と同じく私も言おう、彼女は私には暴君だから、うっちゃっておくと。外見のシミや、明らかな欠点、過ちのほか、内面の欠陥で密やか、あるものは個人的なもので、あるものは女性に共通のもの、不機嫌さの爆発とか邪悪な資質、穢れた病が、当該の事例において考察するにふさわしい。女性の穢れ、まず第一に月経についての考察は、サヴォナローラが不浄だとし、彼の第7規則〈正しくは第9規則〉において深く考察されるべきと述べ、またプラティナは『愛についての対話——マントヴァ人ルドヴィコ・ステッラへ』で広範に扱っている。ルイージ・ボナッチォーリは『女性論』第2巻第2章で、ピエトロ・カプレットも、アルベルトゥス・マグヌスも、そしてほとんど数限りない医者たちが扱った。カルカニーニの『弁明』での愛する者は、愛する人の指輪になりたいと心から願った。そうして聞き、かき抱き、見、何をかは私にはわからないが、するためである。おお、馬鹿者め、と指輪は言う、もしお前が私の場所にいたならば、恥じるべきもの、後悔すべきものを見聞きすることになり、それはおまえを彼女に嫌悪を抱き憎悪させ、然り、彼女ゆえに、おそらく全女性を嫌悪、憎悪するはずである。

私は彼女の心の不徳、すなわち高慢、羨望、嫉妬、無節操、弱さ、悪意、身勝手、軽薄、あくなき情欲、嫉妬について言っているのではない。『シラ書（集会の書）』（25. 14.）では「女性のものほどの悪意はない」、『伝道の書（コヘレトの言葉）』（7. 28.）では「女性のものほどの敵意はない」。同じ著者〈ソロモン〉が『箴言』（31. 10.）で述べているように「有徳の女性なんて誰が見つけるのか」と疑問を呈している。「良かろうと悪しかろうと、有益であろうと不利に働くものであろうと、欲情がもたらすもの以外、正しきことも善きことも彼らは知らず」[テレンティウス『自虐者』第3幕第1場〈642-43.〉]、（その喜劇役者が言うように）欲するままに行動する。

人間の毘、人生の悲歎、  
夜の略奪物、昼間の酷い心煩い、  
老いも若きもの男の不幸。

[ジョン・リーチ〈『優れたムーサ』〉]

詩人 [タティオス] においてユピテルが仄めかしたように、その目的にそって彼らは創られた、

大胆なプロメテウスが私から盗んだ火は  
女という名の疫病で復讐されよう、

その魅惑し誘惑する面立ちに

哀れな人間どもは愛に溺れ、死をかき抱くことになる定め。

[〈ヘシオドス『仕事と日々』54-58.〉タティオスの英訳からの引用]

要するに、ネヴィツァーノ〈の『婚姻の詩歌集』1. 162.〉のなかでディオゲネスが結論づけているように、欠陥をもっていない女はない。誰もがそれぞれの欠陥をもっている。

彼らは誰もが何らかの欠陥をもっている、

もし一人が悪行に満ち満ちているなら。

もう一人は酒好きな目つきをしている。

もし一人が奔放さに満ち満ちているなら、

もう一人は小言がましい女。

[チョーサ『薔薇物語』〈4261, 4263-66.〉]

レアンドロスが溺死したとき、セストスの住人たちはヘロの灯火をアンテロスに奉獻し、愛に成功した者が蠟燭を灯すこととなったが、蠟燭を灯した男は一度も眼にされたことはなく [カルカニーニ「カエリアヌスの物語」、それは女性の移り気と軽薄さの印にはかならないと言える。

なぜならば、千人のうち一人とて良きものはいない。

皆とても誇り高く、恩知らずで、不人情、

心は頑なで、他人の歎きには無頓着、

自分の欲望にはいとも向う見ず、盲目的に駆られ、

しかし、ここでさらに話すことは禁じられている。

本当のことを言ったがために非難されることもしばしば。

[アリオスト『狂えるオルランド』第25巻〈正しくは第29歌〉第70連〈3-8.〉]

私は彼らに対して訴訟を起こそうというのではないので、それゆえ私を誤解しないよう注意を促したい。「私はどの人妻にも触れない」[ホラティウス〈『諷刺詩集』1. 2. 54.〉]。すべての男たちとともに私は女性を尊重する。彼女たちを不快にさせるより、尊重すべきであるゆえ、ジョウゼフ・ホールが〈『一方の性、同性の世界』第2巻第95葉「ウィラギアについての記述」で為した「言葉によってであれ、行為によってであれ、いかなる悪しきことも、いとも高貴な性に対し、私がおこなうことはない」との誓いを、私は進んで為そう。シモニデス、マントヴァのバティスタ、プラティナ、ピエトロ・アレティーノ、その他女性嫌いの面々に、それが過ちだというのなら、責めを負っていただく。彼らやその他の人たちのうち、書かねばとせかされるものの十分の一も私は書いていない。「女性について書かれた罵詈雑言や諷刺のすべては一卷に込められぬ」

[クリストバル・フォンセカ『愛の円形闘技場』]。(実を言えば) 私が述べてきたことは、目下の論では女性がより多く取り上げられているとはいえ、女だけに関するものではない。(再度、すべてのことにたいして弁明しておくが) 私は男女どちらの性に対しても偏見をもっているわけではなく、それゆえ厳しいわけでもない。一方の性について私が言ったことは、その名を変えれば〈ホラティウス『諷刺詩集』1. 1. 69〉、たいていもう一方の性についても理解できる。私の言葉はルキアノス[の『デモステネス頌歌』]におけるパウソンの絵のごとし。パウソンに関しては、ある人が、馬が踵を上にあげ、仰向けにひっくり返るところを描いてほしいと注文したとき、彼は馬を歩かせて描いた。注文主が作品を受け取りにやってきたとき、彼は怒って、自分の注文したものとまったく逆だと言った。しかしパウソンは絵をひっくり返して、注文した通りの絵の馬を見せ、注文主を満足させた。もし、誰かが私の言葉に異議を感じるなら、名前を変えて、彼を彼女と読んでいただきたい、そうすればすべて筋の通るものとなる。

しかし私の目的としては、もし、なべて女性がそんなにも悪く(しかも男性はもっと悪いなら)、結婚するのはなんと危険なことか、どこに男は良き妻を探し、女は良き夫を探せばいいのか。男は女を慎むが、妻は別。婚礼は帳消しにすること、結婚は傷つけること、求愛は嘆くこと(と言う者もいる)。スカリジェ(父)が言うように、「妻は消耗熱、しかも死によってしか治癒しない」〈スカリジェ(子)「傍論」〉。メナンドロス〈『アレポロス』か『笛吹女』を引いてアテナイオスが言うには、

おまえは歎きの大海に身を投げるのだ――

三十隻のうち三隻の船が沈まずに済むリビアやアジアの大海へではない。

妻を娶れば誰も絶対助からないのだ。

[[『食卓の賢人たち』第13巻第3章〈559E.〉]

結婚に付きまとう世の煩い、悲惨、不満を、経験を積んでいる者たちから学んでほしい、私はその経験がないのだから。「私は書という子どもたちを産み出したのであって、書は精神の子どもである」[シュネシオス〈『書簡集』1.〉]。私としては、彼と一緒にしらばくしておくことにする。

立ち去れニンフたち、偽りの種族よ、立ち去れ乙女たち、

婚姻の生は私の性に合わない、

私が好むのは……。

[リプシウス『古代の著作の註解』第3巻]

多くの既婚男性がその悲惨さに悲鳴をあげ、妻を罵り倒している。私は経験がないが、何人かが言っているのを聞くところによれば、

海は決して海ではない、あなた方、もっとも厳しい海よ。

[プラウトゥス『アシナリア』第1幕]

アイルランドの海も妻ほども荒れ狂ったり猛威を振るったりはしない。

シケリア海峡に逆巻くスキュラとカリュプティスも

それほど恐れるべきものではない。どんな野獣もこれほど酷くない。

[セネカ『オエタ山上のヘルクレス』〈235-36.〉]

このことゆえに、財産、肉体と幸福の財産、つまり健康、子どもたち、友人たちを奪い去った悪魔も、ヨブをさらに苦しめようと邪悪な妻だけを残した、と大抵の註解者たちが考えた。ピネダがテルトゥリアヌス、キプリアヌス、アウグスティヌス、聖プロスペル・ティロ、ガウデンティウスから引いて立証するように、「その毒から新たな種の厄災が生じ」、「地獄の底より」、地獄のどんな悪鬼たちより酷く彼を苦しめ痛めつける。悪女がどんな結末を生み出す前提になっているかを知っているがゆえの結論である。「ユピテルも人間にこれより酷い禍を与えることはない」とシモニデスは言う。『シラ書（集会の書）』では「邪悪な妻と家庭をもつぐらいなら龍や獅子と暮らす方がまし」（25. 18.）、『箴言』では「荒野に座っている方が良い」（21. 19.）、再び『シラ書（集会の書）』では「邪悪な妻ほどの邪悪さはない」（25. 21.）、「彼女は悲しい心、陰鬱な表情、傷ついた気持ち、弱々しい手、虚弱な膝を生み出す」（25. 23.）、『伝道の書（コヘレトの言葉）』では「女性と死は世界でもっとも辛いもの」（7. 26.）、テレンティウスは「今日妻が私のところに連れてこられる、それは私にとって、家に帰って首を吊れ、と言っているように思われる」（『アンドロス島の女』第1巻第5幕〈254-55.〉）と述べる。しかし、これらすべてにもかかわらず、我ら独身の男は結婚したい、かのウェスタの処女と結婚したい、と望むのである。

幸せな花嫁よ、もし結婚が甘美なものでなければ、私は死んだ方がいい。

[セネカ（父）〈『論議』6. 8.〉]

この世にこれほど甘美なものはない、妻を娶りたいものだ、と彼は言う。

というのも、喜んで独身生活を棄てよう、

良き妻を得ることができるのなら、

ハイホー、夫を求めて彼女は叫ぶ、悪しき夫を求めて、いや、かつて存在したなかで誰よりも悪しき夫を。おお、幸いなる結婚、おおもっとも喜ばしい結婚、そんな風になれた二人は幸せ、我々はひたすらそれを求め、成し遂げるまで満たされない。しかしその行く先はどうだ。鳥

籠暮らしに飽き飽きして、思うがままに飛び去ることができるまで、それをとても求める、〈ヘインスの〉エンブレム『『愛のエンブレム集』19. 〈正しくは2. 12.〉]での鳥のように、捕えられ、自由になれなければ、同じ食べ物を与えられても、つまらなさにやつれ果て、食べようともしない。だから我々は結婚を推奨するのだ。

我々が惨めな自由の身であるときには  
愛する女性を見つめる。だが、残念なことに、ひとたび扉が閉ざされれば、  
その内側では、蜜だったものが胆汁となる。

我々が求愛者である間は、気の向くままに接吻したり抱しめたりし、これほど甘美なものはなく、自分で思っているように、まさに天国にいたのであるが、いったん結ばれ、自由を失えば結婚は地獄、「ぼくの黄色の半ズボンを返してくれ」〈チャペル『イングランド古民謡』「ジョン・トムスンと妻のジャックマン」のリフレイン〉、罠に捕えられたネズミだってあの頃と同じぐらい楽しく生きている、我らのなかには地獄そのものでなくとも煉獄にいる者もいる。諺にもあるように、「戦争は経験しない者には甘美」〈エラスムス『格言集』4. 1. 1.〉、語るだけなら戦争も愉し、そして結婚も考えているうちは甘美。実際に経験してみれば、戦いが非常に危険で、苛立たしく、絶えず死の蔑みを受けているように、結婚も同じである。スタニハーストが語るには、かの粗野なアイルランド人の貴族がヘンリ2世によってもてなされ（王がダブリンでクリスマスを迎えたときのことだが）、王侯らしい食べ物、芳醇な葡萄酒、美味な料理を味わい、銀、金、宝石を施されたエナメルの重厚な食器や黄金の燭台、立派で豪華な壁掛け、豪華な家具を眼にし、そして、王の楽団の喇叭の音、横笛や太鼓、あらゆる種類の妙なる音楽を聴いたとき、紅のマントを纏い、王冠をかぶり、手には笏をもって、玉座に坐した王の、堂々とした姿を眺めたときには、その哀れな男たちは驚嘆し、恋に落ち、相手に夢中になってしまったために、「我が家で今のまでの粗食に嫌気がさし」、自分の卑しい暮らしぶりを恥ずかしく思ったのであった。彼らはその時点ですっかりイギリス人といえるであろう。イギリス人でなければ、また甘んじて以前の自由を失ってしまったときでなければ、互いに逆らい始める者もあり、時すでに遅しではあるが、自分のしてしまったことを後悔する者もいる。このことはわれら独身者にとっては真実で、あの美しい顔を、女性が醸すあの派手な装いを眼にし、見つめ、心地よい仕草や優雅さを眺め、セイレンのごとき歌声を聞き、踊るのを見るなどすると、彼女たちの性格も顔立ちと同じように美しいと思い、物言わぬ印に取りつかれて、「かき抱き」、夢中になり、燃えあがり、結婚したいと思う。しかし、それに伴う悲惨、煩勞、悲嘆を感じると、多くは悲しみ、最後には泣き喚き、そこから解放されることはない。何人かが経験から報告するように、このことが事実となれば、私としては妻を娶るなど願ひ下げ、ある滑稽詩人〔アテナイオス〕が言うには、

第二の妻を娶った者はもっとも悲惨に

滅びるがいい。一方、最初の妻を娶った者は呪うまい、  
その者は最初、厄災について知らなかったのだと思うから。

『食卓の賢人たち』第13巻第3章〈559〉、著者の弟ラルフ・バートンの英訳付き]

何度も何度も結婚する者に、私は何と言うべきだろうか、

結婚の端綱の中に愚かな鼻面を突っ込む者に。

[ユウェナリス〈『諷刺詩集』6.43.〕]

私は彼に憐れみをかけない。というのは、彼は初めに、為しうることを為せねばならないからで、端綱をときおり頭と肩で支えて、隣の者が乗馬するままにし、さもなければ逃げだし、あるいは、かのシラクサの人が嵐の中で、あらゆる重いものを船外に放り出さなければならなくなったときに、「もっとも重たかったがゆえに」、自分の妻を海に突き飛ばしたようにしなければならない[ミエデス『機知について』第3巻第7章]。しかし、このことを——私は告白するが——面白おかしく語っているのだから、あなたにはそのように受け取ってもらいたい。真面目に哀しみを捉えれば、結婚は束縛、隷属、頸木、あらゆる善き企ての妨害である。[独身者は常にもっとも立派な者である(ベイコン〈『随想集』8「結婚と独身生活について」)〕。エパミノンドスのように、子孫ではなく記憶の中に永遠性を求めなさい。彼は子どもたちの代わりに、自身が二人の娘と呼んだ、二つの偉大な勝利を後に残した。結婚は(「彼は妻を迎えたので行くことができない」〈『ルカによる福音書』14.20.〕)、すべての躍進への障害であり、岩礁でもある。そこでは多くの者が救われるのだが、しかし多くの者が突き当たり、多くの者が投げ出されもする。結婚はそれ自体としては悪ではなく、災厄でもなく、あらゆる満足と幸福に満ちており、神が喜んだ三つの事柄の一つ、「男と彼の妻が睦まじくあること」[『集会の書』25.1.]で、誉れある幸福な状態であることを、誰が知らないであろうか。もし彼らが控え目で、賢く、誠実ならば、詩人が示唆しているように、

もし適切な愛が生まれているならば  
彼らに喜びが欠けることはまったくくない。

[エウリピデス『アンドロマケ』〈179-80.〕]

しかし、野獣のように完全に感覚によって導かれる、分別を欠いた淫蕩な者たちにとって、結婚は致命的な疫病であり、しばしば地獄そのものであり、ほとんど、あるいはまったく満足をもたらしすることができない。というのは、彼らはその欲望においてきわめて異常で桁外れであり、その愛情においてきわめて偏倚だからである。彼[皇帝アエリウス・ウェルス]が述べているように、「妻とは欲望ではなく、品位の名前である」[スパルティアヌス〈『ローマ皇帝伝』〕「アエリウス・ウェ



ルズの生涯」(5. 11.)」。妻は家事にいそしみ、家庭を守り、子どもたちを育て、テーブルの端に座り、肉を切り分ける——ある淫蕩な男たちが考え、言うように。彼らはむしろ売春宿に出かけた、あるいはときおり、そこに立ち寄ることができる一瞬をとらえ、自分自身の妻よりも隣人の妻を借りる。しかも彼らは、ある君公や偉大な者たちがおこなうように、自分たちの望むままにする多くの宮廷人たちのように振る舞い、罰を受けることなく飛び出すだろう。

他の者の妻たちにねじ込む。

[ホラティウス〈『諷刺詩集』1. 2. 34-35.〉]

あるいは、あのトルコ人たちの一夫多妻が、カエサルがかつてローマで布告した、(リフウス・ファン・デル・ベケンと他の者たちは疑っているが)「偉大な者たちは好きなだけの、望むだけの妻を娶ることができる」(スエトニウス『ローマ皇帝伝』「カエサル」52.)というユリウス法が、あるいはアイルランド人たちの離縁がおこなわれていた。しかし、当然のことながら、これらの淫蕩な男たちが、きわめて多数の獣的な男たちが——いつも同じことではないだろうか——いかに彼女が美しく、いかに徳に満ちていたとせよ、一人と結びついているのは困難であるし、彼らに満足を与えることはなく、一人を長く愛するのは彼らにとっては耐えられない。あなたの望む快樂と偽りを述べなさい。パルメノンがタイスに語ったように、「おまえは一人の男では満足できないだろう」[テレンティウス『宦官』第1幕第2場(121-22.)]。そして、多くの男も一人の女では満足できないだろう。パンが父のメルクリウスに、おまえは結婚しないのか、と問われてこう答えた。「決して。父よ、私は愛する者だから」[ルキアノス〈『神々の対話』第4巻(22. 4.)]。「私は一人の女性に、ピュティアス、エコー、メナデスに満足できません」。私は、彼の想い人がほかに何人いたかは知らないが、彼は結婚を甘受しなかったのかもしれない。多様さが好ましい。結婚は忌まわしく退屈である——それは一つのものではないだろうか。諷刺作家[ユウェナリス]がヒベリナについて語っていることがもっとも真理をついている。

ヒベリナは一人の男で満足なのだろうか。すぐさま彼女には、  
一つの眼で満足するように強くなければならぬ。

[ユウェナリス〈『諷刺詩集』6. 53-54.〉]

彼女は、たえず新しい形相を求めている第一質料自体のようにいかなる刻印も受け容れることができ、彼らの感情は海のように干潮と満潮とを繰り返す。夫はある妻たちにとっては自らの卑劣さを隠す外套である。彼女がひとたび結婚したならば、自分の思いのままに飛び立つだろう。夫という名称はすべてを善となす聖域である。(セネカが述べているように)「いかなる女も、自分の情夫を嫉妬させるため以外には、夫を取るようなことがなくなった」(『恩恵について』3. 16. 3.)。彼女らは正しく真っ直ぐで、当代の宿屋の亭主の娘、アリオスト(『狂えるオランダ』28.

52ff) のなかのスペイン人の売春婦のごとく、新真のスバルタ人であり、メッサリーナのごとく善良な妻である。多くの男たちは自らの選択において変わることなく、ネロ自身のように善き夫であるが、見る者すべてに対して欲望を抱くにちがいない。そして、一言でいえば、女たちよりもはるかに気紛れである。

というのは、彼らは囚われているからだ、嫉妬に  
あるいは傲慢さに、あるいは新奇な愛に。

〈チョーサ『トロイラスとクリセイデ』2. 755-56.〉

善き男たちはしばしば悪しき妻を娶る、ソクラテスにとってクサンチッペが、聖ルイ〈正しくはルイ7世〉にとってエレオノーラが、エドワード2世にとってイザベラが悪しくあったように。そして、善き妻たちはしばしば悪しき夫と結ばれる、マリウムがヘロデと、セリナがディオクレティオスと、テオドラがテオピロスと、テュラがゴルムと結ばれたように。しかし私は、放埒で悪しき夫たちについて、独身者たちとその悪徳については何も語らないことにしよう。彼らの善き性質は、まさに一巻にも値する主題であるが、あらゆる村、町、都市においてすでによく知られているので、それは説明を必要としない。結婚する者たちを動揺させないように、また愛する乙女たちを落胆させないように、当座のところ、私は彼らについては見過ごすことにしよう。

男と女はきわめて不敬虔であり、本性上墮落しており、愛情ではさまよい続け、きわめて獣的で、すぐに諍いに陥り、結婚の慣わしに順応しないのであれば、私は何と何をすべきであろうか。もしあなたがこのような者たちの一人ならば、あるいはこのような妻に出会うのであれば、そこにいかなる協和が可能であろうか、いかなる合致の希望が可能であろうか。それは結婚コンユギウムではなく不コンユルギウム和であり、[カメラリウスの]『シンボルとエンブレム集』[第3巻82.〈正しくは第1巻82.〉]における、本性上嫌悪し、敵対している葦と羊歯のごときのものである。あなたが満足のいく結婚をしようとするならばそれは20分の1の確立であり、宝くじで一枚の当たり券のために40枚の空くじを引くのと同様である。あなたは多数の女たちから善き妻を選ぶことはほとんどできないだろう。小さな満足、したがって少ない慰安、というわけである。

あなたは決して、悦びに溢れて、満足した日を過ごすことはないだろう。

[シモニデス〈正しくはセモニデス、『断片』7.99.〕]

もし彼女が不毛ならば、彼女は——ないであろう、等々。もし彼女が子どもを産むならば、そしてあなたの状況が良くなければ[バイコンによれば「子どもはより苛酷な不幸をもたらす」〈『随想集』7.〕]、あなたが慎重で用心深いとしても、あなたの責務があなたを滅ぼすだろう。

——多産な妻は子どもたちであなたの家に重くのしかかるだろう。

あなたは子どもたちを育てることができないだろう。「そして、子どもをもうけて、あなたが遺産どころか、飢えと渇きだけしか残すことのできないことより悲惨なことがあるだろうか」[ヘインズ『書簡体論攷』]。「飢饉が蔓延し、パンを乞い求める者たちの声が大きくなり、父親の心を刺し抜く」[クリストバル・フォンセカ『愛の円形闘技場』]。子どもたちを広い社会に放り出し、自分でやり抜かせることほど悲惨なことがあるだろうか。欠乏に類似するような災難はない。そして、もしあなたに資産があり、子どもたちの教育に入念に気を配ったとしても、彼らは思いのままにならないだろう。次の古い格言についてだけ考えなさい。「偉人たちの子どもたちは悪に染まる」(エラスムス『格言集』1. 6. 32.)。「ああ、私は独身でいるか、子どもをもたなければ良かったのに」と、アウグストゥスはスエトニウス(『ローマ皇帝伝』2. 65. 4.)において叫んだ。ヤコブにはレベンが、シメオンにはレヴィが、ダビデにはアンモンが、アブソロンにはアドニアがいた。賢人の息子たちは総じて愚者である。というのも、スパルティアヌスが結論しているように、「偉大な者たちのほとんど誰も、最上で有益な息子を残さなかった」(『ローマ皇帝群像』「セウエルス」20. 4.)からである。彼らには子どもがなかった方がはるかに良かったであろう(同書 20. 5.)。これはまた、中流の人々にも共通のことである。あなたの息子は大酒飲み、賭博師、浪費家で、あなたの娘は愚か者、売春婦で、あなたの召使いは怠け者、役立たず、泥棒で、あなたの隣人は悪魔で、彼らはあなたの人生を耐えがたきものにするだろう。「もしあなたの妻が、自分の意のままにならないと御しがたくなるならば、あなたは生きたまま埋められたほうがよいだろう。彼女はまったく我慢ができず、いつも怒っており、悲劇の中のユノのようにわめきちらすだろう」(セネカ『狂えるヘルクレス』第1幕)。そこには嵐しかなく、すべては喧騒の中にある」[レメンス(『自然の隠された驚異』)第1巻第6章]。もし彼女が優しく愚かならば、あなたは石塊と結婚したほうがよいだろう。彼女はあなたのことを恥ずかしく思い、あなたの秘密を暴くだろう。もし彼女が賢く、学識があり、きわめて有能ならば、また同様に、別の側面からの多くの危険がある。ネヴィッツァーノが述べているように、「学識ある妻を娶ることはきわめて危険である」[『婚姻の詩歌集』第2巻101番]。彼女はあまりに生意気で、気難しいだろう。

コルネリアよ、母上よ、私はあなたよりも、ウヌシア出身の娼婦を選ぶ。

[ユウエナリス(『諷刺詩集』6. 167.)]

注意しなさい。もし彼女があばずれなら、彼女を遠ざけなさい。もし彼女が高慢なら、あなたを破産させるだろう。「彼女はあなたの財産をつまらぬ物に費やし、全アラビアも彼女の髪に香水をつけるのに十分ではないだろう」と(偽)ルキアノスは述べている[『恋する者たち』第4巻(40.)]。もし彼女が美しく好色ならば、彼女はあなたを寝取られ夫にするだろう。もし彼女が醜いならば、塗りたくるだろう。「もし彼女の顔が生まれつき醜いなら、彼女はそれを技術、外部からの巧みな欺きによって直すだろうが、それに誰が耐えることができるだろうか」[同書(38.)]。

もし彼女が化粧をしなければ、彼女はひどく醜く見えるだろう。あなたは彼女を愛することができず、そのことがおそらく、あなたを不誠実な者にするだろう。クローマは『歴史』〈正しくは『ポーランド人の起源と事蹟について』〉第12巻において、カシミールについて、彼は身持ちが悪かったと書いている。というのは、彼の妻である、ヘッセ方伯ハインリッヒの娘アデルハイトはきわめて醜かったからである。もし彼女が貧しかったら、（ネヴィッツァーノが述べているが）彼女は自らともに極貧を、悲惨を、不満をもたらす。もしあなたが乙女と結婚するならば、彼女がいかなる者になるのかは不確実である。

彼女はおそらく、あなたにとってふさわしい者とはならないだろう。

もし彼女が若ければ、おそらく好色で無知である。もし彼女が好色ならば、あまりにふしだらで、そしてもし彼女が満足しないならば——あなたは場所と時を弃えているが——諍いがないことはなく、すべては喧騒の中にあり、保つべき平静さはほとんど存在しない。もし彼女が年老いた乙女ならば、分娩中に死ぬ恐れがある。もし彼女が裕福な寡婦ならばあなたは自ら畏にかかり、彼女は予め、すべてを他の子どもたちのもとに移し去るだろう、等々 [ネヴィッツァーノ『婚姻の詩歌集』第2巻第55〈、56〉章]。

——誰がいばりちらす妻に耐えられるだろうか。

彼女はあなたを最初の夫と較べて、いつも舌打ちするだろう。もし彼女が若い寡婦ならば、しばしば貪欲で厚かましい。もし彼女が裕福で、出自が良く、多大な持参金をもち、あるいは貴顕と繋がりがあるならば、あなたの妻の友人たちがあなたを家ごと食べ尽くすだろう。「裕福な女たちは家に破滅をもたらす」。彼女はひどく自惚れて、ひどく誇りが高く、ひどく傲慢だろう。というのは、

——裕福な女よりも耐えられないものは存在しない、

からである。あなたは大鷹の雄のようになるだろう。「彼女はあなたの上に乗れ、自分の意のままに支配し」[ペトラルカ]、彼女の専制支配の中で天下を取り、加えてあなたを無力にするだろう。大セネカが彼らについて厳しく当たっているように、「裕福な妻たちは服従を要求する」(『談判・説示演説集』第2巻〈正しくは第1巻〉第6演説)。「私は持参金を受け取り、支配権を失った」(プラウトゥス『驢馬物語』)。彼女たちは支配権を手に入れるだろう。「あなたは妻として支配者を呼び寄せた」。彼女たちは付き添いをもつだろう。彼女たちは自らが欲することをおこなうだろう。あなたは、持参金を得ることによって、あなたの自由を失う [もし女が夫を養うならば、彼女は怒り、生意気になり、溢れる非難を浴びせる (『伝道の書』25. 24.)]。持参金が入り、

自由が出てゆく。あなたは自分の資産を危険にさらす。

多大な持参金のなかには、これらと他の多くの  
不都合と、耐えがたい出費が存在している、等々。

〈ブラウトゥス『金の小壺』532-33.〉

このような多くの不都合があるので、せいぜいのところ、彼女は命令する従者である。あなたはお決まりの服を着た善良な家政婦の娘を雇ったほうが良かったであろう。そこにはこのような危険が存在しているのだから、もしあなたが賢いのであれば、あなた自身を今のままに保ちなさい。結婚は良いことであるが、自由であることのほうがはるかに良い。

——子どもたちをもうけることは、もっとも喜ばしいことである。

しかし、ヘラクレスにとって、自由であることがはるかに喜ばしい。

[ブラウトゥス『法螺吹き軍人』第3幕第1場〈682-83.〉]

あなたは若いのだから、まだ結婚してはならない。もし年老いていたならば、決して結婚してはならない [ストバイオス『説教』第66番、アレッサンドロ・ダレッサンドロ〈『愉快な日々』第4巻第8章]。

あなたは若いのに結婚したいのか。まだその時は来ていない。

年齢が重ねられると、すでにその時は去っている。

したがって、かの哲学者 [ストバイオス] とともに、あなたに結婚を強いる友人に対しては、いつも次のように答えなさい。「まだ時宜を得ていない」〈『説教』第66番〉。そして永遠にそうだろう。

さらに、既婚者と比べて、独身者でいることはいかに自由で、いかに幸福で、いかに安寧で、いかに至福かを考えなさい。彼 [テレンティウス] が喜劇 [〈『兄弟』43.〉] で語っているように、「私は、かの人々が幸運であると思うような妻をもったことがない」。そして、私の隣人たちのすべてが、幸福がきわめて大きいと見なして、私を讃嘆し、賞讃するような妻をもったことがない。いかに彼が満足して、静かに、きちんと、心地よく、そしていかに楽しく暮らしているかを考えなさい。彼には自分自身以外に気遣いし、喜ばせる人はなく、負担もなく、彼を支配する人もなく、いかなる家にも縛られず、果たすべき義務もなく、いつ、どこへ行き来することも、望むところに住むこともでき、自分自身の主人であり、自分自身が望むことをおこなう。童貞の卓越性について考えなさい。「童貞は天に値する」[彼らは天で羊を世話する。というのは、彼らは女たちによって汚されていないからである。『ヨハネによる黙示録』14.〈14.〉]。結婚は大地を満たし、童貞は天国を満たす。エリヤ、エリシャ、洗礼者ヨハネは独身者だった。童貞性は貴重な宝石、美

しい花冠、決して萎まぬ花である。ダブネが常緑の月桂樹に変わったのは、ただ処女性が不死であることを示すためだったのではなからうか。

花が壁のある庭園の中で秘かに育ち、  
家畜に知られることも、鋤に打ち碎かれることもなく、  
微風が撫ぜ、太陽が活気を与え、雨が育てるように、  
乙女も誰にも触れられず、庇護者に大切にされる間は、その花のようだが、  
ひとたび純潔を失ってしまえば……

[カトゥルス『詩集』「婚姻の歌」〈62. 39-41, 45-46.〉]

処女性は、ボナヴェントウラが言うように、すてきな一幅の絵画 [『救済の部屋』第22章]、それ自体祝福されたもの、教皇主義者を信じるなら、功德に値する。そういう人たちに対して、何かしら不都合、煩わしさ、孤独などの、かの安楽のなき出来事もあるけれど、病める者のそばにいて、病を癒し、菴法となり、治療を探し求める女性もいて、抱擁、恋の戯れ、接吻に、首に手を回すなど、猛烈な誘因や多情な快樂を新妻はたいてい楽しむものだ。だが、そんなことは、結婚に伴う度重なる重荷に比較すれば、たやすく耐えうる点においては取るに足りないもの。孤独は愉しみ、音楽、良き仲間、多忙さ、就業で避けることができ、言いかえれば「楽しみが少なければ、悲しみも少ない」[マルティアヌス〈『エピグラム集』12. 34. 11.〉]。良き夜を迎えるためには、良き日を過ごさなければならない。私が思うに、往々にして多くの裕福な独身者たちのあいだでは、後援者がいるはずで、その人たちが、最初の恋に失恋したり、恋が実らなかつたり、何らかの理由で独身を自ら選んだり、年老いて、老いぼれ、醜悪な姿となり、不満を抱いた未婚の女たちが一緒に暮らす修道院のような施設を建設する。私が述べたい残りのことは、処女性の数えきれない内実や比べようもない特権によって十分相殺される類の、取るに足りない事どもである。こういったことを考えてみよ、未婚、既婚両方の人生を比較し、最後に独身者がもっている好都合な特権について熟慮してみよ、いかに高評価されるか、いかに心暖かく友人に迎え入れられるか、テルトゥリアヌスが述べるように「いかに偽りの丁重さで」賞讃され、付き従われ、「おとりの贈り物が贈られ」、(アンミアヌスが言うように)「いかに貧相な仕方でも崇められるか」(第24巻〈正しくは第14巻6. 22.〉)、いかなる仕方でも愛され、尊敬されるかを。「もし子どもがいなければ」(そして財産があるなら)、プルタルコスが付け加えて言うように、「招かれ、王侯に傳かれ、支払いなしで思うことを希うことのできる支持者を得るようになるだろう」[『子孫への愛について』〈4.〉]。そうすれば崇拜され、高く評価されるだろうか。

——しかしながら、もしあなたが主人に、主人たちの王になりたいと思うなら、あなたの館で、ちいさなアエネアスや彼より美しい娘を遊ばせていいだろうか。

石女の妻は愉快で親しい友人を作ってくれるものだ。

〈ユウエナリス『諷刺詩集』5.137-40.〉

独身を通せ、結婚はするな、そうすればいかに遺産狙いたち（そう昔の人たちは呼んだものだ）が君を追いかけ、跡継ぎになったり、遺産執行人になったりする最賈を得ようと賄賂を贈ったり追従を言ったりするか、すぐに気づくはずである。タキトゥス [『年代記』11.] やセネカ [『恩恵について』第6巻第38章] が記しているように、アルンティウスやアレティウスといったこの手の有名な食客たちすら彼らには及ばない。プラウトゥスにおいて、かの良き嘘つき老人ペリプレクトメヌスはこのことをよく理解していた、というのもプレウシクレスが彼に、自分の子どもがもてるようにと結婚を勧めたとき、彼はすぐにこのように応えたからである。

私にはたくさんの親戚がいるというのに、子どもをもつことは必要だろうか。

今では私は幸せに良い暮らしをし、心の欲するままに生きている。

私が死ねば、財産は親戚たちに分かち行くように言っておこう。

彼らは私のところにやって来て世話をし、私が何をし、何が欲しいか気をつけてくれ、

私に贈り物をし、昼食や夕食に呼んでくれる。

〈『法螺吹き軍人』705-8, 10〉

あなただって、彼のように独身で生きたなら、同じように大切にされる。だが、一旦結婚すれば、「生涯、あなたには隷属が待っていることを考えなさい」〔<ストバイオス『説教』66.〉ギリシア語から <のゲスネルス訳『論攷』〕、いかに重い荷物を背負い込むことになるか、いかに酷な仕事に縛り付けられることになるかをよく考えてもみなさい。（なぜならヒエロニムスが言うように、「妻のいる者は、負債者であり、さらに悪いことに妻の奴隷であり」〔『書簡集』123. 5.〕）、いかに絶えることなく、なんとという心の卑しさ、なんとという煩わしさ、なんとという出費が付き纏うことか。というのも、妻や子どもというものは、常に請求書の種、さらに幾多の心労、悲惨、厄介ごとがあるもの。かの喜劇作家のプラウトゥスが愉快に語り、しかもそれが真実であるように、厄介を抱え込みたい男性は、船の所有者となるか妻を娶ればよく〔『カルタゴ人』210-11.〕、別の人がプラウトゥスを支持して言うように、妻と子どもたちが自分を破滅させた。この種の生活には、とても多くの、無限ともいえる足手まといが伴うものである。さらに妻というのは膨れるもの、そのほか彼〔テレンティウス〕が喜劇の中で言うように、

妻を娶った、そこで妻が悲惨とわかった、生まれた息子たちはさらなる心労だった。

〔『兄弟』〈867-68.〉〕

贈り物も招待も消え失せ、友達は何もあなたを評価せず、あなたは自分の惨めさを嘆き、かの有

名な桂冠詩人にしてヴィテンベルクのヘブライ学教授のバルトロメウス・シェラエウスとともにこぼすほかなくなるだろう。私はこの仕事をずっと前に終えたが、(彼の言葉を使えば)「私の背中をほとんど粉々に打ち砕いた、他の辛く悲しい事どものうち」、クサンチッペの頸木、がみがみ女の私の妻が、何にもまして測れないほどに私を苦しめた [『ダビデのヘブライ語詩編における道程』]、と嘆き悲しむことになるということだけ付け加えておこう。というわけで、法律家ポロネウスと一緒に、「もし妻がいなければ、私はどんなに幸せであったろう」[ブルゾーニ〈『滑稽話集』〉第7巻第22章]と、あなたは歎き、ついには泣き喚くしかなくなる。もし私の言ったこのことで十分でなければ、レメンス『自然の隠された驚異』第4巻第13章、デスパンス『節制について』第6巻第8章、コルンマン『処女性について』、プラティナ『愛についての対話』「愛し方の実践」、バルバロ『結婚について』、アルニサエウス『国家論』〈第1巻〉第3章、またあらゆる者の鏡たる法律家ネヴィツァーノ『婚姻の詩歌集』、これらのほほどのページにもあるので見ていただきたい。

#### 第5節 第4項 媚薬、魔法で詩的な治療法。

説得やその他の治療が訪れないところでは、多くの人が、媚薬、護符、呪文、組紐、符号、まじないなど、違法な手段に走る。もし、アキレスの槍による傷のように為され、もたらされた傷であるならば、同じようにして癒されなければならない。もし、呪文や媚薬によって強いられたものであるならば、符号や呪文によって癒されるべきであると、パラケルススは『アルキドクセン』第2巻第28章で言った。フェルネルは『病理学』第6巻第3章で、シェンクは『医学所見』第4巻で、魔術的にもたらされ、魔術的に治療された例をいくつか挙げ、同様に、魔女による例についてジョヴァンニ=バッティスタ・コドゥロンキが『毒による病と魔術による病』第3巻第6章で、シュプレングが『魔女への鉄槌』〈第2巻〉第6章で述べている。実を言えば、こうした方法は許されていないが、おこなわれるのはしばしばである。さらにウェイエル『悪魔の欺瞞』第3巻第18章〈正しくは第38章〉「媚薬の治療」、デルリオ『魔術探求』第2部第3巻〈正しくは第3巻第1部〉第3問題第3節第3論を読んでいただきたい。カルダーノは〈『事物の多様性について』〉第16巻第90章で、多くの磁石の治療薬を挙げ、同様に指輪の穴に放尿するといったことも述べているが、ミゾー『自然の記憶されるべき秘密について』第3巻30.も然り。ジャンバティスタ・デッラ・ポルタ、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ、ロベル〈『植物論』1576年版〉98、87頁、マッティオーリ〈『ペダニウス・ディオスコリデスの医薬剤についての著書への註解』〉等も幾多の馬鹿げた治療法を著述している。摂取したマンドレイクの根、驢馬の蹄鉄で作った指輪、彼女に知られず枕の下に潜ませた愛する人の糞等々、その酷い臭いを嗅げば、男の恋心は治まる。ピロストラトス〈の『アポロニウス伝』〉第3巻におけるインドの裸行者イアル



カスの助言によれば、梟の卵は相手を抑制させる。彼女の血液を飲めば愛の感覚はことごとく無くなった。マルクス・アウレリウスの妻ファウスティナは剣闘士への愛に囚われたため、カルダノーの忠告からすっかり離れてしまったと、ユリウス・カピトリヌスは繰り返し述べている。占星術師のなかには、ヘルメスやソロモンやカエルなどの符牒、髪をなびかせた女性の像、等々からの多くの符号の像から功を得る者もいるだろう。われらが古の詩人たちと空想的な作家たちは、恋患いのような病に対する多くの作り話の治療を描いている。たとえばピロストラトス〈が『英雄譚』でプロテシラオスの墓での治療について語るが、作中でのポエニクスと葡萄園園丁との対話では、かの神殿の稀なるご利益について話した際に、プロテシラオスの祭壇と墓が「消耗熱、水腫、四日熱の瘡、眼疾など、ほとんどいかなる類の病も癒し、その他には、恋患いのような病にも効力がある」。しかしもっとも著名なのはギリシアのかの有名な岩、レウカスの岩で、それについてはストラボンが『地誌』第10巻〈2.8-9.〉で、サン・モールから遠くないと書き、サンディズは〈『旅行記』〉第1巻〈3.〉で、その岩から、もし誰か恋する者が真逆さまに身を投げたら、すぐに快癒すると述べている。アドニスの死後、ウェヌスは恋ゆえに安らぐことがなく、

彼女の正気を失った炎が髓の髓を燃え立たせたようなときには、

[カトゥルス〈『詩集』100.7.〕]

苦悩から放たれるために何をすべきか知りたくてアポロンの神殿にやってきた。アポロンは彼女をレウカスの岩に遣り、そこで彼女は飛び込み、すぐさま解放された。そしてウェヌスがその理由を彼に尋ねたとき、ユピテルがユノに恋をしたとき、ここへやってきて、身を洗い、彼の後でも別の輩が飛び込んだ、とアポロンは応えた。ケパロスはデゴネトスの娘プロテラへの愛ゆえに、あのレスボス島のサッポーは惨めなほどに溺れたパオンゆえに、ここから跳んだ。

欲望の狂気に突き上げられて彼女は高みから真逆さまに身を投げる。

[メナンドロス〈断片255.〕]

楽になりたいと願い、そして愛の疼きから解放された。

ここで、デウカリオンはピュラへの愛に燃えて  
身を投げ、すぐさま身体は無傷のまま水を  
叩き、愛は逃げて行った。

[オウィディウス〈『名婦の書簡』〉第21書簡〈正しくは第15書簡167-69.〕]

この治療については、スカリジェ（子）が『アウソニウス講義』第18巻、ザルムートが〈『記憶すべき事象』〉（パンチローリ翻訳『世界の七不思議』による）で語り、そしてその他の作家たち

ちも語っている。プリニウスはキュジコス人にはクビドに捧げられた井戸があり、恋する者がその水を飲めば熱情が緩和された、と報告している（『博物誌』31. 16, 19.）。アントワヌ・デュ・ヴェルディエールは『神々の像』〈カルターリ『古代神々の像』の翻訳）「クビド」で、古代人には愛の忘却の川があり、「燃え盛る松明を手に取り、その川で火を消したと言った。エリュキナのウェヌスの神殿にはクビドの像があり、それについてオウィディウスが言及し、「恋の苦悩から逃れたいと、古の恋人たちは挙って、ここへ巡礼の旅をした」〈『愛の治療法』549-54.〉と述べている。パウサニウスは『ギリシア案内記』「フォキス地方」で、アカイア（今のレパント）のナウパクトスにある、洞窟のウェヌスの神殿について書いている。そこでは、再婚したいと思っている未亡人が女神ウェヌスに祈願し、恋する者たちに関わるあらゆる類の懇願が始まり、彼らの悲しみが救われた。上述のパウサニウスは『ギリシア案内記』「アカイア地方」〈7. 3. 1.〉で、ギリシアのセネロス川について大いに語り、もし誰か恋する者がその川で身を洗えば、その水の秘蹟の力で、（同様に極端な冷たさのゆえに）、愛の苦痛から癒された、と言う。

愛の傷はそれを為したものが癒す。

[セネカ〈正しくはプブリウス・シュルス『格言集』30.]

もしそうなら、パウサニアスの言っている水はそんな黄金よりも貴重ということになる。述べてきたような治療が施されないところでは——他にどこも知らないが——、恋人たちは突き進むほかなく、アウソニウス〈の詩「十字架にかけられるクビド」〉でのように、反逆を起こして、自分たちの要求が叶えられ、欲望を満たすまで、クビドを十字架にかけるしかない。

\*太字表記は原文がラテン語、ギリシア語であることを示す。

\*原注には、典拠の該当箇所と、テキストの引用が見出される。典拠は [ ] 内に示し、テキストは訳出に反映し、必要と思われる部分は [ ] に補った。

\*その他の補注や訳出の補完は 〈 〉 に示した。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.). Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied*

*in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.  
Burton, Robert. *Anatomie de la Melancolie* (3 Vols.). Traduction de Bernard Hoepffner et Catherine Goffaux, Préface de Jean Starobinski, postface de Jackie Pigeaud. Paris: José Corti, 2000.

既訳

- 「第1部 第1章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第59号 2007 所収  
「第1部 第1章 第2、3節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第60号 2008 所収  
「第1部 第2章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第61号 2009 所収  
「第1部 第2章 第2節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第62号 2010 所収  
「第1部 第2章 第3節 第1-10項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第63号 2011 所収  
「第1部 第2章 第3節 第11-14項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第64号 2012 所収  
「第1部 第2章 第3節 第15節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第65号 2013 所収  
「第1部 第2章 第4節 第1-6項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第66号 2014 所収  
「第1部 第2章 第4節 第7項-第5節、第3章 第1節 第1・2項」  
『京都府立大学学術報告 人文』 第67号 2015 所収  
「第1部 第3章 第1節 第3・4項-第3節、第4章」  
『京都府立大学学術報告 人文』 第68号 2016 所収  
「第3部 第1章 第1節 第1項序-第2節 第2項」  
『京都府立大学学術報告 人文』 第69号 2017 所収  
「第3部 第1章 第2節 第3項-第2章 第2節 第1項」  
『京都府立大学学術報告 人文』 第70号 2018 所収  
「第3部 第2章 第2節 第2-3項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第71号 2019 所収  
「第3部 第2章 第2節 第4-5項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第72号 2020 所収  
「第3部 第2章 第3節 第1項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第73号 2021 所収

(2022年10月3日受理)

おかむら まきこ (文学部 共同研究員)

いとう ひろあき (専修大学 教授)